宮城県文化財調査報告書第 70 集

金　取　遺　跡

昭和 55 年 3 月

宮　城　県　教　育　委　員　会
宮城県仙台土地改良事務所

序　　文

豊かな風土に恵まれた大和町のシンボルは、緑と清水の豊かな七ツ森連峰であり、この自然的景観は遠く松島や青葉城からも遠望され、実に素晴らしいものであります。この七ツの森が整然とセットされた麓の丘陵耕地を農道が走り、日常生産や農耕用に長い年月にわたり利用してきましたが、近代社会情勢の変化に伴い、農業地域における農業生産物の流通を能率化し、円滑にするため既存する道路を改編し、機能のより高い道路改修が立案され、「農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」台ヶ森地区として、実施することになりました。

工事に先がけ先祖が豊かな自然と長い歴史で創造し守り育ててきた遺跡の取扱いについて、県文化財保護課と協議したところ記録保存のための調査を実施することになり、同課に快くお引受け頂いた次第であります。

調査の結果、この遺跡は縄文時代の集落跡と推定されるにいたりました。

この調査に当たって御協力いただきました関係各位に深甚なる感謝の意を表しますとともに本書が広く活用されることを願うものです。

昭和55年3月

仙台土地改良事務所

所長　松 岡 幸 夫

目　　次

序文
Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
Ⅲ．調査の方法と経過 …… 5
第一次調査 …… 5
第二次調査 …… 5
Ⅳ．発見された遺構 …… 7
1．遺物包含層 …… 7
2．土壙 …… 9
Ⅴ．出土遺物 …… 10
1．土製品 …… 10
⑴ 縄文土器 …… 10
第一群土器 …… 10
第二群土器 …… 12
第三群土器 …… 36
⑵ 耳飾 …… 37
⑶ 円板状土製品 …… 37
2．石製品 …… 39
⑴ 剥片石器 …… 39
石鏃 …… 39
石錐 …… 39
石匙 …… 39
不定形石器 …… 39
⑵ 石核 …… 39
⑶ 磨製石斧 …… 42
⑷ 凹石 …… 43
⑸ 磨石 …… 43
⑹ 石皿 …… 43
Ⅵ．考察 …… 47
1．遺構 …… 47
a．遺物包含層 …… 47
b．土壙 …… 47
2．遺物 …… 47
a．出土土器に関する問題点 …… 47
b．その他の遺物 …… 48
Ⅶ．まとめ …… 49

例　　言

1．本書は、農村漁業用揮発油税財源身替農道整備事業にともなう金取遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査の主体者は宮城県教育委員会、宮城県仙台土地改良事務所である。
3．発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、大和町教育委員会の協力をいただいた。
4．石器の材質同定は東北大学助教授蟹沢聡史氏にお願いした。
5．土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を、土性区分は国際土壌学会法の基準を参照したものである。
6．本文中の第1図に使用した地図は、建設省国土地理院発行の1/25,000地形図「吉岡」を使用して複製したものである。
7．整理、報告書の作製は文化財保護課が行なった。担当者は小野寺祥一郎である。

Ⅰ．調査に至る経過

金取遺跡は、黒川郡大和町吉田字金取にある。

吉岡の中心部から西へ約4.5㎞、黒川丘陵の北端に、吉田川によって形成された河岸段丘上に立地する。

仙台土地改良事務所は、昭和53～54年度にかけ、大和町台ヶ森地区で延長3.1㎞の農道整備計画をたてた。この事業は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業として行なうもので、白ヶ森地区の中央部を縦断する基幹農道を改良整備するものであった。

ところが、金取北5番地付近で、金取遺跡と係り合いを有し、農道の拡幅計画で南側と北側にわたり遺跡の一部約550m^2が切土される計画が示された。

そのため、関係者間で遺跡の取扱いについて協議を重ねたが、現場の状況から設計の変更が困難と判断されるに至った。

こうして、昭和53年11月15日～22日の間に南側約350m^2の緊急調査が、さらに昭和54年4月24日に北側約200m^2の事前調査が行なわれた。

Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境

金取遺跡は仙台市から北へ約20km、国道4号線沿いにある大和町の町役場から約4.5km西方の地点、黒川郡大和町吉田字南に所在している。

黒川郡は県北部にあって大和町、富谷町、大郷町、大衡村の三町一村から成立している。大和町は、黒川郡全面積の50％以上も占めており、郡の西端から中央部まで細長く延びており、黒川郡の中心に位置する。

大和町の西には東北地方を南北に縦断している奥羽山地があり、それから派生している富谷丘陵、加美・大松沢丘陵によって大和町は西・南・北の三方を囲まれている。そして、これら丘陵群に狭まれるように吉田川が町の中心部からやや北側を東流している。吉田川は奥羽山麓地帯の加美丘陵や大松沢丘陵を開析しながら東流している。また、町内には吉田川とその支流によって形成された開析谷と河岸段丘が数多く残されており、遺跡の形成と深く結びついている。

本遺跡は、吉田川が形成した河岸段丘上に立地している。遺跡の所在する金取地区には、吉田川によって形成された河岸段丘平坦面が広がっている。遺跡はこの段丘平坦面の東縁辺に立地する。また、段丘平坦面を北、南から囲むように北側には吉田川が、南側には南川が流れており遺跡の東側においてそれらは合流している。遺跡の北・東・南側は比高差5m以上もある急斜面となっている。遺跡部分の標高は約55m、吉田川との比高差は約10mである。遺跡の現状は、水田、畑地、山林(杉林)である。遺跡中央を県道桝沢吉沢線へと続く農道が通過している。北方には、吉田川を挟んで加美丘陵を眺めることができる。南方には、標高500～600mを超える七つ森連峰が並び立って間近に迫っている。また、西方には、標高1502mの船形山を中心とする奥羽山地が連なっている。

次に町内の遺跡を中心にして歴史的環境を概観して見たい。大和町には金取遺跡をはじめとして現在73か所の遺跡が発見されている(宮城県教委:1976)。旧石器時代の遺跡としては、長原遺跡があり、ナイフ形石器、石刃などが発見されている。このことは、大和町の歴史は旧石器時代にまで遡ることを示している。縄文時代において、最も古い遺跡としては早期の貝殻腹縁文の土器が出土している根古遺跡があげられる。その他、縄文時代の遺跡としては、安楽院跡遺跡(中、後期)、勝負沢遺跡(中期)、一の坂遺跡(中期)、仁和田利遺跡(中期)、四十八滝遺跡(中期)、立輪遺跡(中期)、中興寺遺跡(晩期)別所遺跡(晩期)等があげられる。勝負沢遺跡からは多量の大木8b・9式土器・石器とともに石組炉を持つ竪穴住居跡が2軒発掘されている(宮城県教委:1973)。

番号	遺跡	番号	遺跡	番号	遺跡	番号	遺跡	番号	遺跡
1	金取遺跡	12	天皇寺遺跡	23	要害遺跡	34	平林遺跡	45	柧木D遺跡
2	仁和田利遺跡	13	金南谷中遺跡	24	松本遺跡	35	亀岡遺跡	46	大衡中学校遺跡
3	麓城跡	14	吉岡古館跡	25	寺沢遺跡	36	亀岡古墳	47	ポニード仙台工場南遺跡
4	麓遺跡	15	吉岡城跡	26	松本A遺跡	37	小沓掛遺跡	48	座府遺跡
5	――	16	安楽院遺跡	27	松本A遺跡	38	小沓掛B遺跡	49	河原B遺跡
6	立輪遺跡	17	中興寺遺跡	28	古城館跡（隠居館）	39	柧木A遺跡	50	河原A遺跡
7	前田遺跡	18	金谷遺跡（八ナ沼遺跡）	29	大衡役場前遺跡	40	柧木B遺跡	51	待井沢遺跡
8	四十八滝遺跡	19	一の坂遺跡	30	大衡城跡（越路館）	41	柧木C遺跡	52	萱刈場遺跡
9	門前城跡	20	中山遺跡	31	八幡神社南遺跡	42	長者E遺跡	53	針遺跡
10	館山経塚	21	中峯A・B遺跡	32	八幡神社遺跡	43	長者F遺跡	54	彦右ェ門橋遺跡
11	馳取経塚（作馳取城）	22	瀬戸原遺跡	33	八幡神社北遺跡	44	長者G遺跡	55	折口館跡（大爪古城跡）

第1図　周辺の遺跡

弥生時代の遺跡としては、石包丁の出土で知られている要害遺跡がある。弥生時代の遺跡は現在のところこの要害遺跡以外は発見されていない。

古墳時代の遺跡としては、真山古墳(中期)、鳥屋八幡古墳群(後期)、新明囲古墳(後期)、郷の目囲古墳(後期)、別所横穴古墳(後期)等がある。鳥屋八幡古墳は、横穴式石室を内部構造として持っていることが確認されている(大和町教委:1966・1967)。

奈良、平安時代の遺跡としては、鳥屋窯跡群(奈良)、中峯A・B遺跡(平安)、西涌田遺跡(平安)、上ノ山遺跡(平安)、天皇寺遺跡(平安)、勝負沢遺跡(平安)等がある。鳥屋窯跡群は、天が沢地区と三角田南区の二群の須恵器窯から成り、8C前半の須恵器を焼いた窯跡であることが確認されている(東北学院大学考古学研究部:1975)。勝負沢遺跡からは、平安時代の住居跡が1軒発掘されている(宮城県教委:1973)。

中世以降のものとしては、城館跡や経塚がある。館跡としては、要害館跡・八谷館跡・御所館跡・泉館跡・鶴巣館跡等がある。八谷館跡、御所館跡、鶴巣館跡が発掘調査されている。いずれも丘陵上に立地し、空堀、土塁がめぐらされ、平場からは掘立柱建物跡をはじめとして各種の遺構が発見されている(宮城県教委:1973・1975、大和町教委:1975)

経塚としては、館山経塚がある。館山経塚は門前城跡の頂上にあり、永和2年の銘がある青銅製経筒が出土している(藤沼:1975)。

これらの遺跡は吉田川流域の自然堤防や周囲の台地・丘陵の頂部・中腹・麓などに立地している。

このように大和町には、旧石器時代以降たくさんの遺跡が存在していることがわかる。そして人々は、大和町の恵まれた自然環境を背景に生活を営んでいたものと思われる。

Ⅲ．調査の方法と経過

本遺跡の調査は、遺跡部分を切土し現在の農道を拡幅する計画がなされたために緊急に行なわれたものである。

調査は二度にわたって行なわれた。第一次調査は、農道の南側にあたる部分約350㎡を対象として昭和53年11月15日～昭和53年11月22日にかけて行なわれた。第二次調査は、農道の北側にあたる部分約200㎡を対象として昭和54年4月24日に行なわれた。

第一次調査

調査区は長軸が東西方向にあることから、その方向に2つの原点A（西側）、B（東側）を設定した。AとBを結ぶ直線は調査区の中央を通過する。AとBを結ぶ直線を東西軸とし、原点Aを通過し東西軸に直交する線を南北軸とした。そして、Aから3m毎に東西軸に直交するように調査区全体を区切り、東西方向をアラビア数字（1区～7区）で表わし、東西軸から南側をA列、北側をB列とする地区を設定した。

調査はまず最初に、調査区全体が杉林であったために杉の抜根を行ない、その際に調査区の表土をすべて排除した。

表土を排除した段階で、調査区西側（河岸段丘平坦面）からは遺構を検出することができなかった。しかし、調査区東側の部分、すなわち河岸段丘の平坦面から斜面に移行する部分からは縄文時代の遺物包含層を確認することができた。この遺物包含層は、長さ約12m、幅約7m、最も厚いところで約40cmであり、堆積層は4層認められた。1層から3層にかけて多量の縄文土器や石器が出土したが、4層からの出土遺物は僅かであった。遺物包含層下は地山となっており、その上面では遺構・遺物を発見することができなかった。また、これらの遺物含包層を切っている近世の墓壙が検出された。

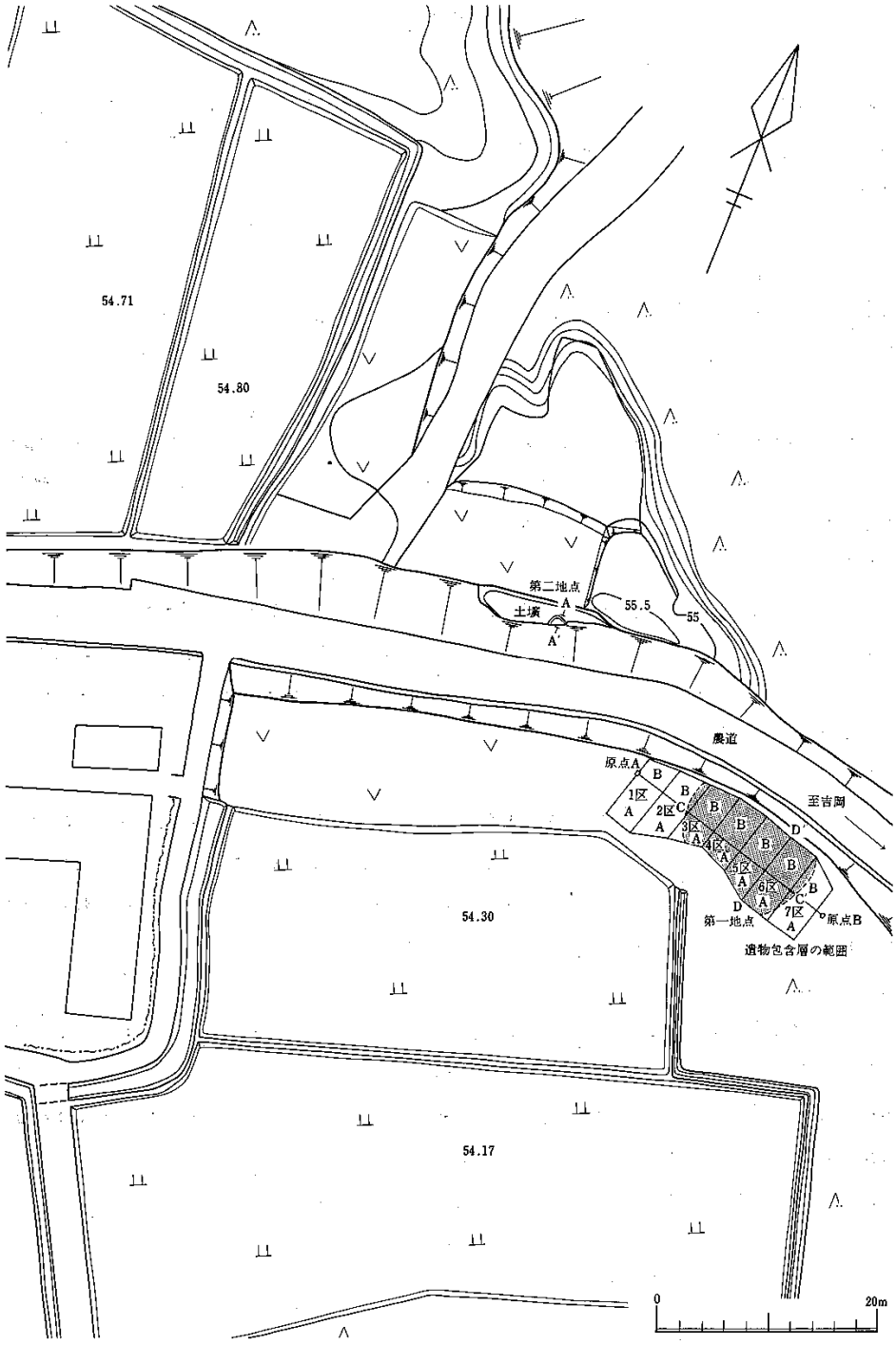
最終日である11月22日に調査区の平面図・断面図の作成及び写真撮影を行ない、調査のすべてを終了した。

第二次調査

第二次調査は対象面積が少ない事もあり、特別な地区設定は行なわなかった。

表土を剥ぐとただちに地山となり、地山面において土壙が1基確認された。この土壙は、南半を農道を造る際に削平されており原形をとどめていなかった。表土及び土壙内堆積土から縄文土器や石器が僅かであったが出土した。

土壙検出後、土壙の平面図・断面図の作成及び写真撮影を行ない、その後、調査区を含む周辺の地形を測量し、調査の一切をその日のうちに終了した。


54.71
54.80
第二地点
土壙
A
A'
55.5
55
農道
原点A
1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
B
C
D
第一地点
原点B
遺物包含層の範囲
至吉岡
54.30
54.17
0
20m

第2図　遺 跡 の 地 形

Ⅳ.　発見された遺構

調査は二度にわたって行なわれたが、便宜上第一次調査が行なわれた地点を第一地点、第二次調査が行なわれた地点を第二地点と呼び説明をしたい。第一地点と第二地点とは農道を挟んで南側と北側にあり近接している。

1. 遺物包含層

第一地点の東側の表土下に遺物包含層が検出され、4枚に細分された。以下各層の状況と分布について述べることにする。

(1層)

シルトで構成されている層で、色調は黒褐色(10ＹＲ2／2)である。木の根による撹乱が及んでいる。2区Ｂ(断面図には表われていない)から7区にかけて分布している。層の厚さは5～20cmである。縄文土器・石器が多量に出土している。

(2層)

シルトで構成されている層で、色調は暗褐色(10ＹＲ3／3)である。3区から4区にかけて分布している。層の厚さは5～15cmである。地山粒が僅かに含まれており、やや堅い層である。遺物は層理面に沿って出土しており、大形破片、一括土器が見られる。縄文土器・石器が多量に出土している。

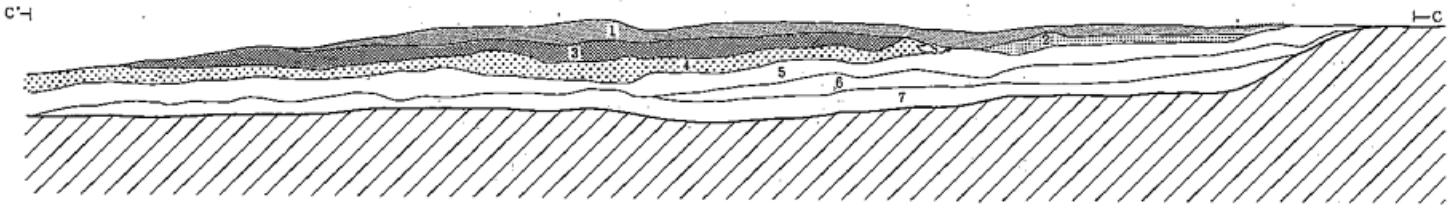
(3層)

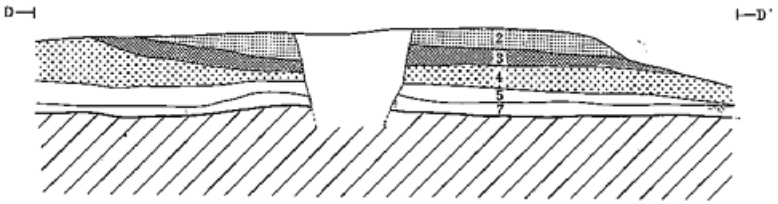
シルトで構成されている層で、色調は暗褐色(10ＹＲ3／3)である。4区から6区にかけて分布している。層の厚さは10～20cmである。地山粒が僅かに含まれており、第2層に比べると柔かい層である。遺物は層理面に沿って出土しており、大形破片、一括土器が見られる。縄文土器・石器が多量に出土している。

(4層)

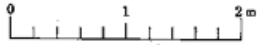
シルトで構成されている層で、色調は黒褐色(10ＹＲ3／2)である。4区から6区にかけて分布している。層の厚さは10～20cmである。地山粒が第2・3層よりも含まれており、やや堅い層である。遺物は第4層につきささった状態で出土するものが多く、第4層でも上半部から出土している。縄文土器・石器が僅かに出土している。

〔出土遺物〕第1層から第4層にかけて多量の遺物が出土している。





層位	土　　色	土 性	備　　考
1	黒褐色　10YR3/2	シルト	遺物包含層1層 遺　物　含　む。
2	暗褐色　10YR3/3	シルト	遺物包含層2層 やや堅い層である。地山粒塊か含有、遺物含む。
3	暗褐色　10YR3/3	シルト	遺物包含層3層 2層よりも柔かい層である。地山粒塊か含有、遺物含む。
4	黒褐色　10YR3/2	シルト	遺物包含層4層 やや堅い層である。地山粒塊か含有、遺物含む。
5	暗褐色　10YR3/4	シルト	地　山 堅緻な層である。地山粒多量に含有、遺物含まない。
6	暗褐色　10YR3/3	シルト	地　山 堅緻な層である。地山粒多量に含有、遺物含まない。
7	黒褐色　10YR3/2	シルト	地　山 堅緻な層である。地山粒多量に含有、遺物含まない。



第3図　遺 跡 の 層 位

2. 土　　壙

〔遺構の確認〕　第二地点の中央からやや東寄りの地山面において確認した。

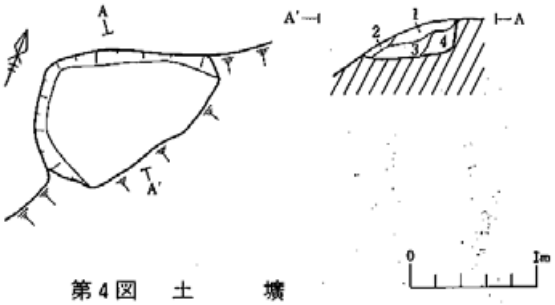
〔平面形〕　農道によって切られているが平面形は方形を基調としていると考えられる。北壁及び西壁はわずかであるが外側にふくらんでおり、北西隅は丸くなっている。北壁で約1.2m、西壁で約0.8mの長さを持つ。

〔堆積土〕　4層認められた。3層、4層は底面に堆積している。

〔底面〕　地山をそのまま底面としており、平坦である。

〔壁〕　地山をそのまま壁としており、約30cmの高さを持つ。底面からの立ちあがりは急である。

〔出土遺物〕　堆積土からは縄文土器及び不定形石器(第25図26・32)が出土している。縄文土器については、摩滅が激しく図示できるものはないが、撚糸文(原体不明)及び縄文(ＬＲ・ＲＬ)が施文されている胴部破片が各１点ずつ含まれている。



第４図　土　　壙

層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色(10ＹＲ3/3)	砂質シルト	地山ブロックを含む。
2	黒　色(10ＹＲ2/1)	砂質シルト	
3	暗褐色(10ＹＲ3/3)	砂質シルト	地山ブロック斑状に含む。
4	にぶい黄褐色(10ＹＲ5/3)	砂質シルト	

Ⅴ．出 土 遺 物

本遺跡からは平箱の数にして約35箱分の遺物が出土している。土壙内堆積土･遺物包含層及び表土から出土している。

1 土製品

土製品には、(1)縄文土器(2)耳飾(3)円板状土製品がある。

(1)縄文土器

本遺跡からは多量の縄文土器が出土している。これらの縄文土器の1、器形　2、文様表現技法　3、文様及び文様構成等について観察を行なった結果、次の三群に大別することができた。すなわち、第一群土器：縄文時代中期の土器群、第二群土器：縄文時代後期の土器群、第三群土器：縄文時代晩期の土器群の三群である。土器の出土量は、第一・三群土器は極めて少なく、出土土器の大半は第二群土器である。

〈第一群土器〉　(第５図)

器形・文様の特徴

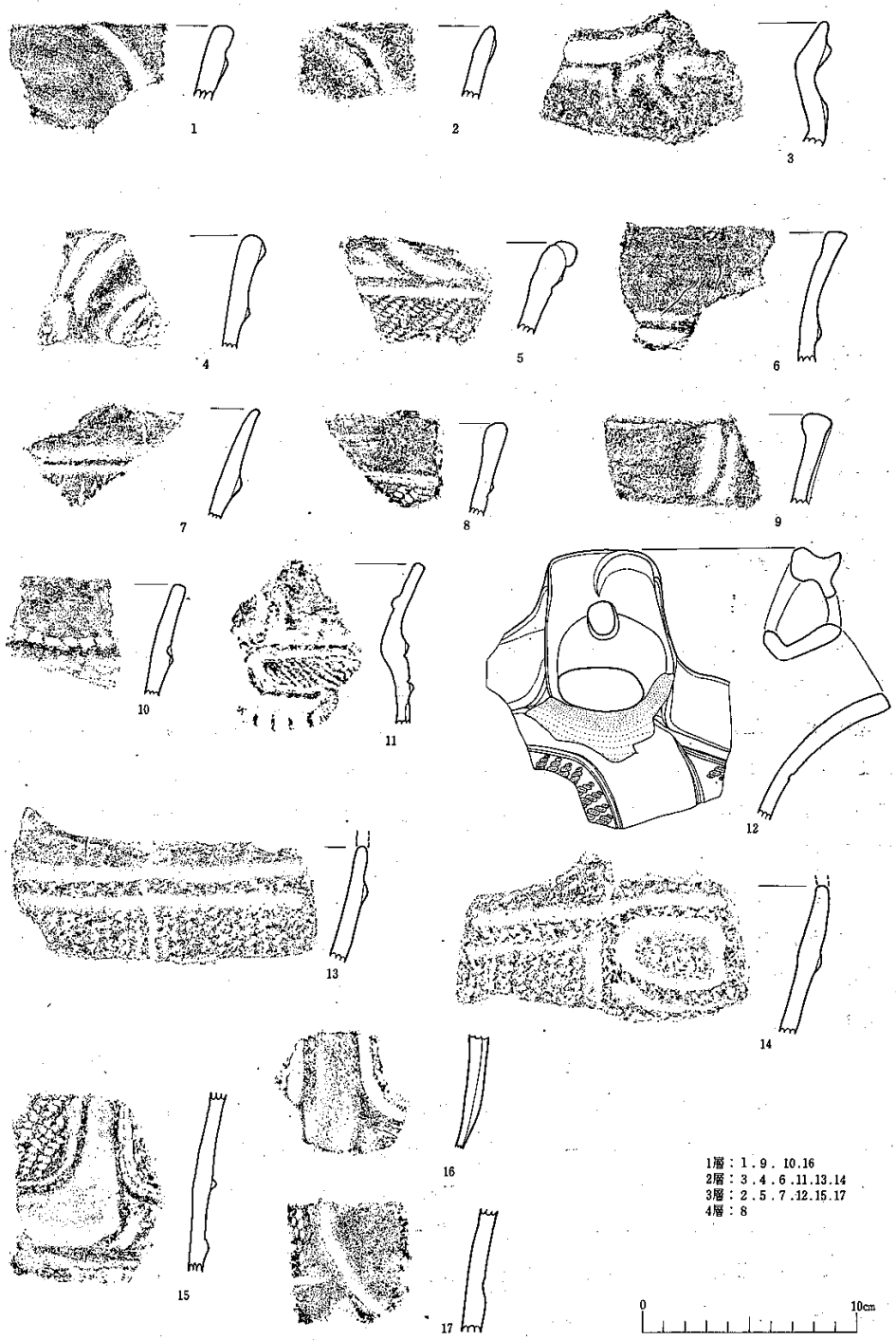
小破片のために全体の器形を窺えるものはないが、いずれも深鉢形土器の口縁部･胴部破片である。口縁部はいずれも外傾する特徴を持つ。12は注口土器である。

全体の文様構成についても不明瞭なものが多い。いずれも断面が三角形の隆起線または沈線によって横方向に展開する文様が施されている。10は隆起線に沿って連続する刺突文が施されている。11は隆起線の一部に刻目が施され、さらに胴部には連続刺突文が施されている。12、13は同一個体と考えられる。口縁部は無文となっており、隆起線による楕円文が見られる。地文は隆起線まで及んでいる。

地文が判明するのは10点であり、縄文(ＲＬ：4、5、8、10、12、15、ＬＲ：11、ＲＬＲ：13、14)撚糸文(Ｌ：17)が施文されている。

年代

これらの土器はいずれも遺物包含層から出土しているが､出土量が極めて少なく小破片で出土することが多い。また、出土地区・層位及び出土状況にもまとまりが認められなかった。13　14については現在のところ類例を見いだすことができないが、文様の展開・文様表現技法等から縄文時代中期末葉の土器に類似点が見られる。その他の土器は、菅生田遺跡(宮城県教委:1973)、中沢遺跡(後藤他：1972)、青島貝塚(後藤他：1975)、梨木囲貝塚(芳賀：1968)出土土器などに類例が見られ、縄文時代中期末葉大木10式のものとされている。したがって、本資料も大木10式に位置づけられる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
1層：1．9．10.16
2層：3．4．6．11.13.14
3層：2．5．7．12.15.17
4層：8
0
10cm

第5図　第一　群　土　器

〈第二群土器〉

土器の分類

第二群土器は本遺跡出土土器の中で最も出土量が多い。しかし、口縁部から底部まで復元できる完形品は少なく、分類のほとんどが破片に頼らざるを得なかった。従って、以下で行なう分類に取扱ったものの中には器形や文様構成が不明確なものも含まれている。このため必ずしも十分な分類と言えない部分もある。特に、明らかに浅鉢形、壺形土器とわかるもの以外は深鉢形土器として一括して扱った。

まず最初に復元資料及び口縁部資料によって分類を行ないたい。その後で口縁部突起、胴部資料、底部資料について述べる。

〔復元資料・口縁部資料〕

土器は大きく器形の違いから深鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器に分けられる。浅鉢形土器、壺形土器は各1点だけである。以下分類を試る。

深鉢形土器

深鉢形土器はⅠ：文様のあるもの、Ⅱ：文様のないものとに分けられる。

Ⅰ：文様のあるもの

これらは器形の違いによってA：頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部外傾もしくは外反するもの。B：胴部から口縁部にかけて外傾するもの、C：胴部から口縁部にかけて外傾、口縁部内反するもの。D：胴部から口縁部にかけて内彎するものとに分かれる。

ⅠA類：頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部外傾もしくは外反するもの

ⅠA類はⅠA1類：口縁端部が内傾するもの、ⅠA2類：口縁部がそのままたちあがるものとに分かれ、ⅠA類1類はさらにa～c類に分類される。

ⅠA1類：口縁端部が内傾するもの

a類(第6図1)　口縁部内面に稜があるもの

頸部で屈曲し、口縁部外反する器形である。口縁部内面には、粘土紐貼付による稜がめぐる。この稜は口縁部内面を一巡し、突起を形成している部分においては、突起まで延びる。口縁～頸部にかけては無文帯となっており、突起下には、この無文帯に貼付された縦位の二本の隆起線がある。この隆起線には、押圧痕が見られる。

胴部文様については、口縁～胴部に連続する資料がないために不明である。

b類(第6図2～7)　口縁部内面に段があるもの

口縁部内面には、口縁部内面上端に粘土紐の貼付をすることによって造り出された段がある。

第二群土器の分類(復元資料・口縁部資料)

(深鉢形土器)

I：文様のあるもの

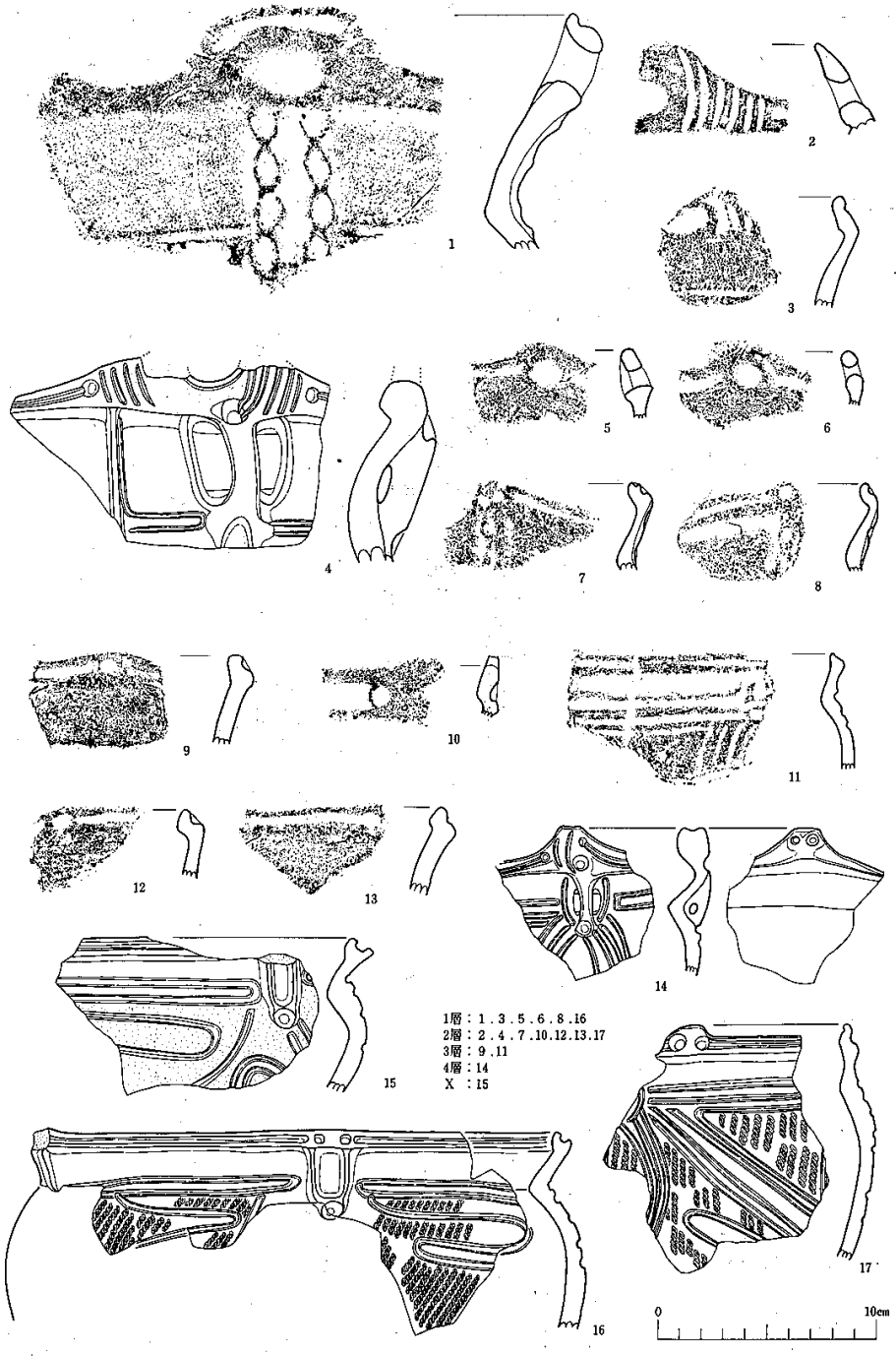
- A：頸部で「く」字状に屈曲、口縁部外傾もしくは外反
  - 1．口縁端部が内傾するもの
    - a．内面に稜のあるもの
    - b．内面に段のあるもの
    - c．内面に稜、段のないもの
  - 2．口縁部がそのままたちあがるもの
- B．胴部から口縁部にかけて外傾するもの
  - 1．口縁部に無文帯のあるもの
    - a．無文帯を画するものが隆起線のもの
    - b．無文帯を画するものが沈線のもの
      - イ．胴部に磨消帯が下垂するもの
        - i．胴部に蕨手状磨消帯のあるもの
        - ii．胴部に連鎖文と三角形に区画された磨消帯のあるもの
        - iii．胴部に馬蹄状磨消帯のあるもの
      - ロ．胴部に沈線のみが下垂するもの
      - ハ．胴部上半に地文部分と文様帯を画する沈線がめぐるもの
      - ニ．胴部が地文のみのもの
  - 2．口縁部に文様のあるもの
    - a．口縁部に隆起線がめぐるもの
      - イ．隆起線に刻目のあるもの
      - ロ．隆起線に刻目のないもの
    - b．口縁部に沈線がめぐるもの
      - イ．口縁部に一条の沈線がめぐるもの
      - ロ．口唇部に溝状沈線がめぐるもの
        - i．胴部に下垂する磨消帯を持つもの
        - ii．胴部に円弧や同心円状の曲線文様が施されるもの
        - iii．口縁部に沈線と円形の刺突の施された縦位の弧状隆帯が認められるもの
      - ハ．口縁部に平行沈線がめぐるもの
    - c．口縁部に隆起線・沈線がめぐらないもの
      - イ．口縁部に文様帯のあるもの
      - ロ．口縁～胴部に連続する文様帯のあるもの
- C：胴部から頸部にかけて外傾、口縁部内反
- D：胴部から口縁部にかけて内彎するもの
  - 1．口縁部に無文帯のあるもの
    - a．無文帯を画するものが隆起線のもの
      - イ．刻目のある隆起線がめぐるもの
      - ロ．鍔状の隆起線がめぐるもの
      - ハ．貼り付け痕の明瞭な隆起線がめぐるもの
      - ニ．丁寧な調整の施された隆起線がめぐるもの
    - b．無文帯を画するものが沈線のもの
  - 2．口縁部に文様のあるもの
    - a．口縁部に溝状沈線がめぐるもの
    - b．口縁部に沈線がめぐるもの

II：文様のないもの

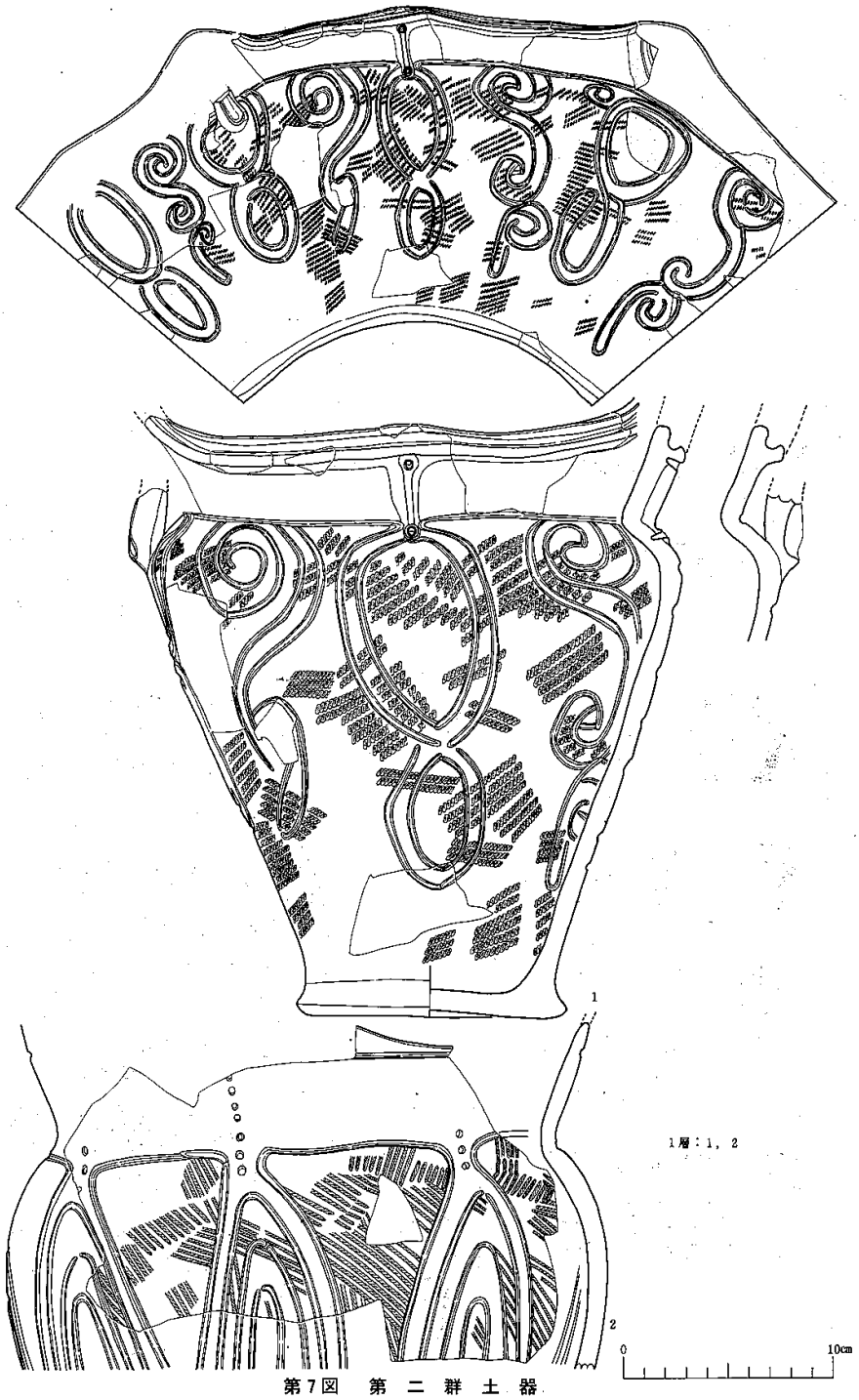
- A：口縁～胴部まで地文が施文されるもの
- B：胴部に地文が施文されるもの

(浅鉢形土器)

(壺 形 土 器)



第6図　第二群土器



第7図　第二群土器

口縁部には円形の盲孔または貫通孔を有し、孔間を沈線で連結している。口縁～頸部にかけては無文帯となっており、その部分には縦位の隆起線（第6図7・8・15・16）、縦位の把手（第6図4・14）が付加されたり、縦位の沈線（第6図11）が施されたりしているものも見られる。第6図7・8は隆起線に刺突が施されている。また、第6図4・14のように、縦位の弧状沈線が施された大型突起の下には把手が配置されるようである。

胴部文様が判明しているものには、一本の沈線によって文様が描かれるもの（第6図15・16）数条の沈線によって文様が描かれるもの（第6図14・17）とがある。第6図17は沈線間が磨消されており、磨消縄文が認められる。

地文の判明しているのは2点（第6図14・17）のみで、いずれも縄文（ＬＲ）が施文されている。

第6図11・14～17は、胴部上半から口縁部まで残っており、胴部上半で膨らむ器形である。

Ｃ類（第7図1）　口縁部内面に稜・段のないもの

頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口縁部には残存部分から推定して、突起が付くものと考えられる。胴部は上半が大きく張り出し、層部で屈折して、胴下部へは直線的に移行する。胴下部はくびれており、外方に張り出して底部に至る。底部は、やや揚底気味になっている。

口縁部外面上端に隆起線がめぐっており、口唇部と隆起線間を調整し、溝状沈線を造り出している。口縁から頸部にかけては無文帯となっており、その部分には縦位の隆起線や縦位の把手が付加される。把手は、口縁部突起下に配置されると考えられる。

胴部には、二本単位の沈線によって「8」字状の文様と「Ｓ」字状又は逆「Ｓ」字状の文様＋渦状の文様とが交互に配されている。「8」字状文様と「Ｓ」字状又は逆「Ｓ」字状文様＋渦状の文様が組み合わさって1単位となり、胴部文様は4単位で構成されると考えられる。

地文としては縄文（ＬＲ）が施文されている。

ＩＡ2類（第7図2）口縁部がそのままたちあがるもの

胴部上半で膨らみ、頸部で「く」字状に屈曲し口縁部で外傾する器形である。口縁部は大半が破損しているが、残存部分から推定して突起が付くものと考えられる。口縁部上端には沈線がめぐっている。口縁～頸部にかけては無文帯となっており、この部分には円形の連続刺突文が縦位に施されている。

この連続刺突文は、突起の存在が推定される部分では口縁部まで延びるが、その他は、頸部に三個の刺突文が縦位に施されるだけである。

胴部文様は、縦位の連続刺突文下から展開する。胴部には刺突文を中心に、左右に分かれた磨消縄文手法による大きめの磨消帯が下垂する。磨消帯の中には、大きめの磨消帯同様に左右に分かれた縄文帯と磨消帯が交互に下垂している。

地文としては撚糸文(ℓ)が施されている。

ⅠB類:胴部から口縁部にかけて外傾するもの

ⅠB類は、ⅠB1類:口縁部に無文帯のあるもの、ⅠB2類:口縁部に文様のあるものに分かれ、ⅠB1類はさらにa・b類に、ⅠB2類はa～c類に分類される。

ⅠB1類:口縁部に無文帯のあるもの

a類(第8図1)　無文帯を画するものが隆起線のもの

口縁部無文帯下には、隆起線がめぐっている。この隆起線には刺突文が施され、連鎖状になっている。

胴部文様については、口縁～胴部にかけて連続する資料が少ないために不明である。

b類:無文帯を画するものが沈線のもの

b類はイ類:胴部に磨消帯が下垂するもの、ロ類:沈線が下垂するもの、ハ類:胴部上半に地文部分と文様帯を画する沈線がめぐるもの、ニ類:沈線下が地文のみのものに分類され、イ類はさらにⅰ～ⅲに分類される。

イ類:胴部に磨消帯が下垂するもの

ⅰ類(第8図3)　胴部に蕨手状磨消帯のあるもの

無文帯の口縁部に円形の刺突文が施され、その直下には磨消縄文手法による蕨手状磨消帯が下垂している。

地文としては縄文(LR)が施文されている。

ⅱ類(第8図2・4・5・7・9～12)　胴部に連鎖文と三角形に区画された磨消帯のあるもの

向かい合う小さな弧状沈線を中心にして、連鎖文とその両側に磨消縄文手法による三角形の磨消帯が下垂している。この弧状沈線は、突起をもつもの(第8図4、5)には突起部内面にも施されている。第8図4の突起は、弧状沈線の他に貫通孔を有している。

地文の判明しているのは7点で、縄文(LR:第8図10、RL:第8図4・7・12)、撚糸文(R:第8図5・9・11)が施文されている。

ⅲ類(第9図1)　胴部に馬蹄状の磨消帯のあるもの

完形品である。全体的にかなりゆがんだ器形の土器である。口縁部も、内彎気味になる部分と外傾する部分が見られる。胴下部がやや膨らんでいる。底部は幾分揚底気味になる。

口縁部には大突起・小突起が各々2個ずつ有している。突起には盲孔が施されている。突起下に

は沈線による渦状文が施される。また、反対側にある大突起下には楕円文が見られる。

胴部には、沈線で区画された馬蹄状の磨消帯が下垂している。磨消しは極めて不十分で、地文が残る場合が多い。この磨消帯の中央には、変形楕円文が下垂している。胴部文様は、3単位で構成されているが、かなり不統一な文様構成である。

地文は撚糸文(R)が施文されている。

なお、イ類に含まれるが、胴部下半が破損のために文様構成がわからず、分類できなかったものに第8図6・8・13～15がある。これらのうち、地文の判明しているのは3点であり、撚紋(ｒ：第8図6、R：第8図8、14)が施文されている。

ロ類(第9図2～4)　胴部に沈線のみが下垂するもの

本類には、第9図3・4のように沈線から上を磨消さないものも見られるが、ここでは本類に一括して含める。

第9図2は、縦位に施された一条の沈線を基準として斜位の沈線が施されている。第9図3・4は小さな楕円文を起点として数条の沈線が下垂している。

地文としては、撚糸文(L:第9図4、R：第9図2、3)が施文されている。

ハ類(第10図)　胴部上半に地文部分と文様帯とを画する沈線がめぐるもの

直立気味に外傾する口縁部が頸部でわずかに屈折し、胴部上半ではわずかに張り出し胴下部に至る。底部はない。口縁部には四つの突起がつく。突起のひとつには貫通孔があり、その他は上端で「凹」部をつくっている。胴部上半には、文様帯の部分と地文のみの部分とを区画する沈線がめぐっている。文様は、突起を中心として横方向に展開すると考えられるが、文様施文の後に地文を施文しているために、文様が消されてしまい、文様構成については不明である。

地文としては撚糸文(L)が施文されている。

ニ類(第9図5～7)　胴部が地文のみのもの。

第9図5は口縁部に突起を有している。口縁部内面には段が見られる。地文としては、縄文(LR:第9図5、7)、撚糸文(L:第9図6)が施文されている。

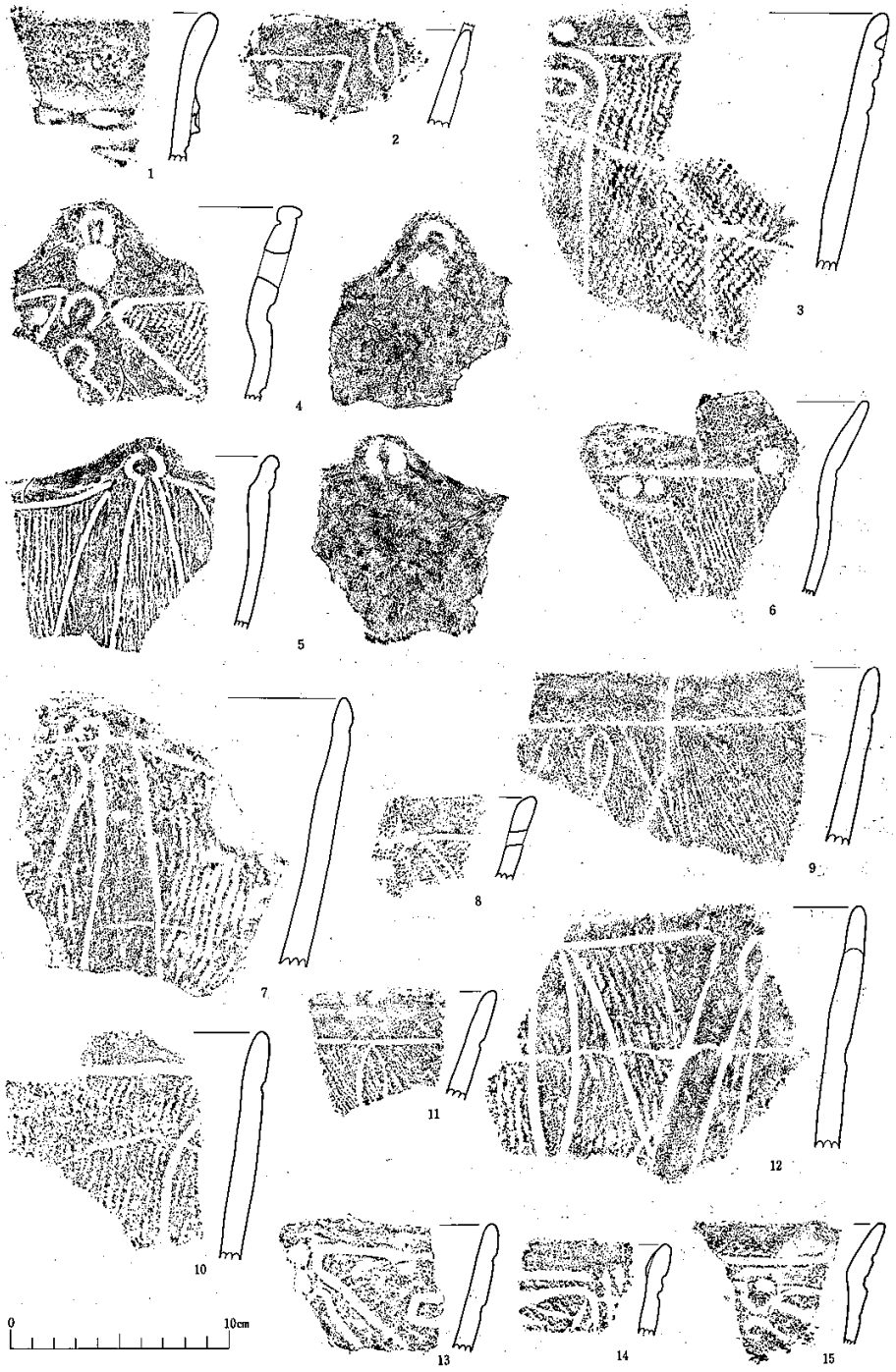
ⅠB2類：口縁部に文様のあるもの

a類：口縁部に隆起線がめぐるもの

a類はさらにイ類：隆起線に刻目のあるもの、ロ類：隆起線に刻目のないものに分類される。

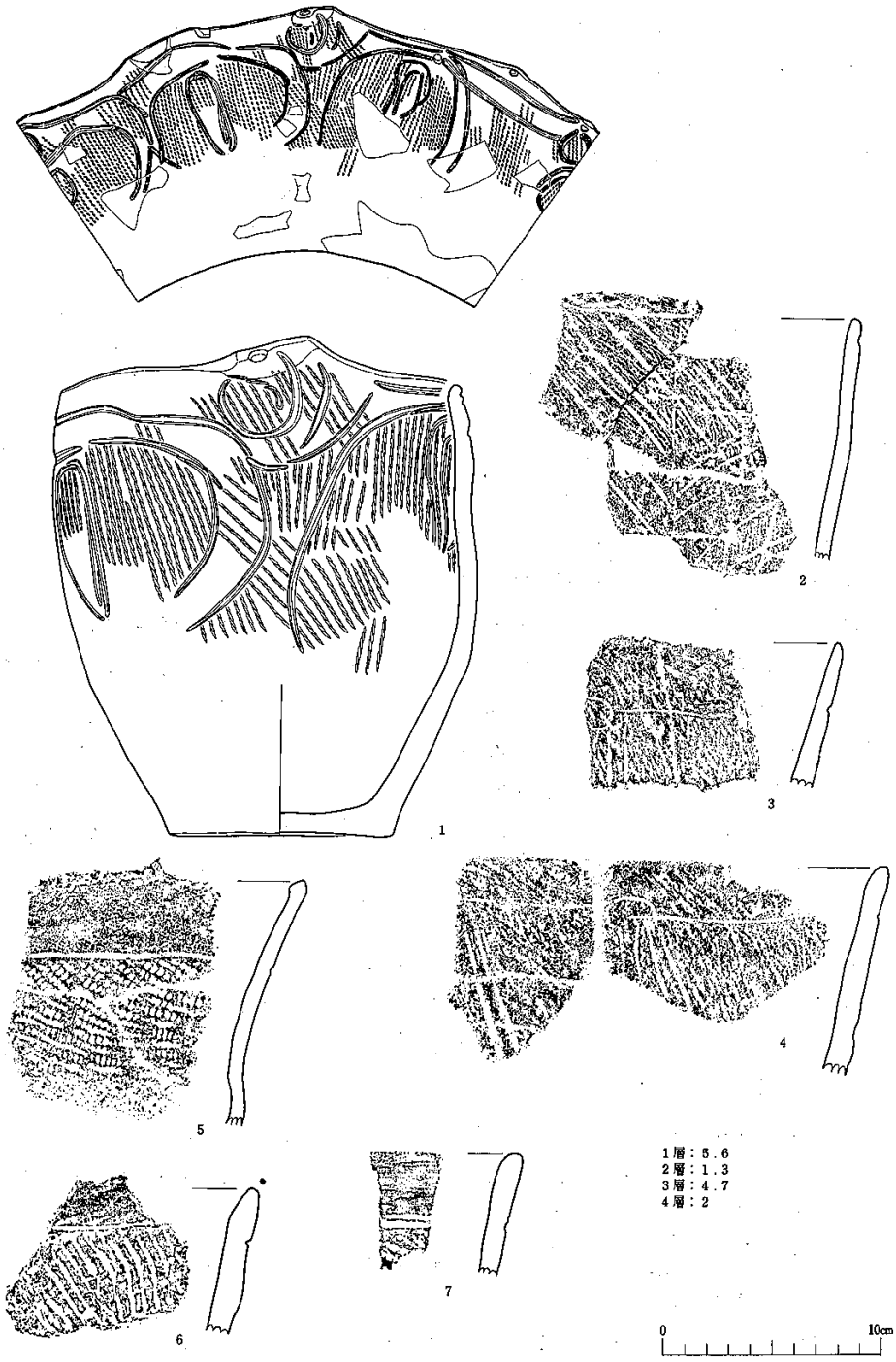
イ類(第11図1～4)　口縁部をめぐる隆起線に刻目をもつもの

口縁部には刻目を持つ隆起線がめぐっている。刻目は、縦位のものと斜位のものとがある。
胴部には、沈線によって曲線文様や、縦位、斜位に展開する文様が描かれると考えられるが、いずれも胴下部が破損しているために文様構成については不明である。



第8図　第二群土器

1層：1.5.6.7.8
2層：4.11.13.14.15
3層：2.9.12
X　：3.10



第9図　第二群土器

地文の判明するのは1点のみで、撚糸文（Ｌ：第11図2）が施文されている。

ロ類（第11図5）　口縁部をめぐる隆起線に刻目のないもの。

口縁部には隆起線がめぐっている。隆起線から上には、一条の沈線と連続する横位の刺突文が施され、隆起線の下には、連続する横位の刺突文が二段にわたって施されている。隆起線から上の刺突文は、先端が丸い小さな工具によって施され、下の刺突文は、やや幅の広い工具で施されている。

胴部文様については、口縁～胴部に連続する資料がないために不明である。

ｂ類：口縁部に沈線がめぐるもの。

ｂ類はイ類：口縁部に一条の沈線がめぐるもの、ロ類：口唇部に溝状沈線がめぐるもの、ハ類：口縁部に平行沈線がめぐるものとに分かれ、ハ類はさらにｉからⅲに分類される。

イ類（第11図6～10）　口縁部に一条の沈線がめぐるもの。

口縁部には一条の沈線がめぐっている。第11図6は、横位にめぐる沈線が渦状（左巻き）になっている。第11図8は、沈線から上に三条ずつ向き合うように弧状の沈線が施されている。また、第11図9・10には口唇部に刻目が施されている。

胴部文様については小破片のために不明なものが多い。第11図7はボタン状貼付文から下垂する沈線が見られ、第11図10には縦位の沈線や沈線による曲線が見られるが、口縁～胴部に連続する資料がないために、文様の展開や構成については全く不明である。

地文の判明するのは1点のみで、撚糸文（ℓ：第11図9）が施文されている。

ロ類（第11図11・12）　口唇部に溝状沈線がめぐるもの。

口唇部には一条の溝状沈線がめぐっている。口縁下部～胴部上半にかけては、縦位や斜位に数条の沈線が施されているが、口縁～胴部に連続する資料がないために文様の展開や構成につては全く不明である。

地文の判明するのは第11図11で、縄文（ＲＬ）である。

この類は、ＩＡ１ｂ類同様、口縁部内面上端に粘土紐の貼付をすることによって造り出された段が見られる。また、口縁端部についても内傾する器形で、ＩA1ｂ類と共通点を見い出せる。

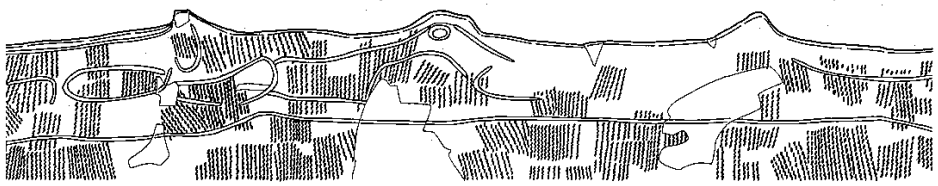
ハ類：口縁部に平行沈線がめぐるもの

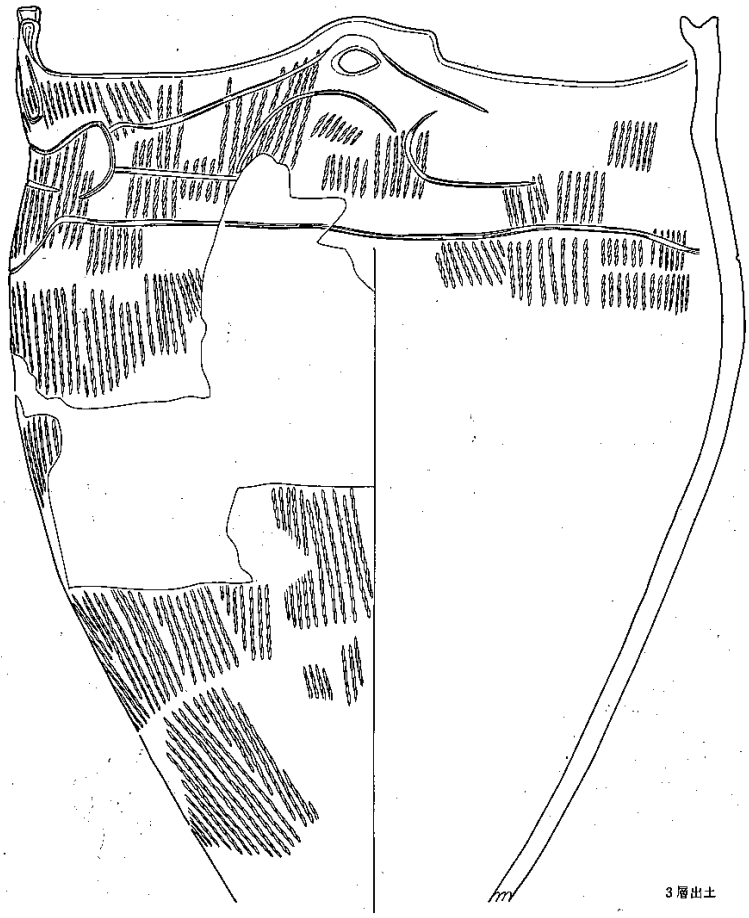
ｉ類（第11図13・17・19）　胴部に下垂する磨消帯を持つもの。

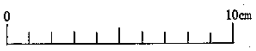
平行沈線は、いずれも突起を頂点として弧状にめぐっている。また、いずれの土器も沈線で区画された範囲が磨消される磨消縄文が認められる。

胴部には、磨消帯が垂下しているが、口縁～胴部に連続する資料がないために文様の展開や構成については不明である。

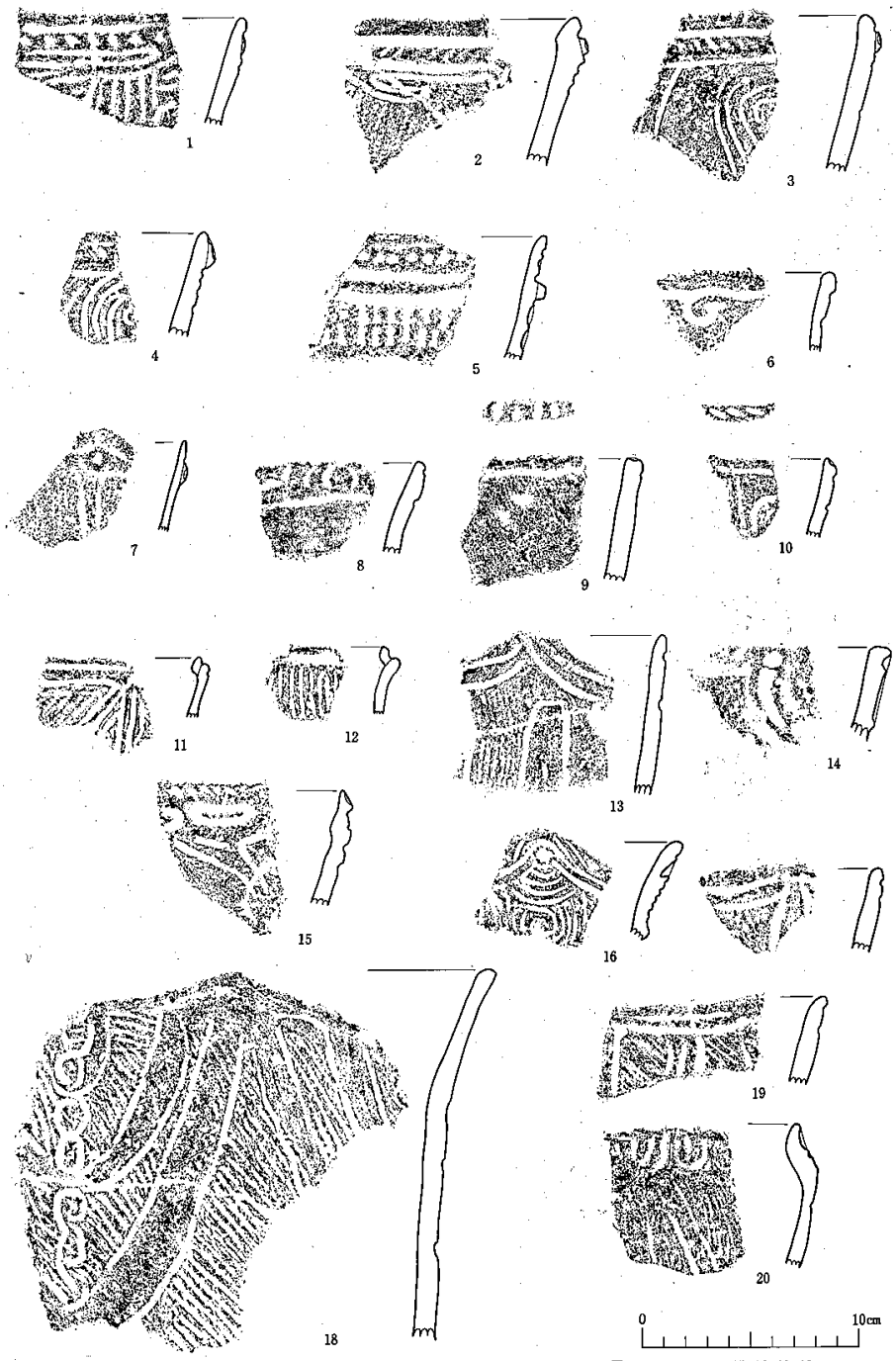
地文の判明するのは1点のみで撚糸文（ℓ：第11図19）が施文されている。







第10図　第二群土器



第11図　第　二　群　土　器

1層：2．8．9．11.15.16.18.19
2層：3．5．6．7．10.13
3層：4．12.14.17.20
4層：1

ⅱ類(第11図16)　胴部に円弧や同心円状の曲線文様が施されるもの。

突起下に円形の盲孔が施され、盲孔を中心にして円弧や同心円状の曲線文様が連結されて胴部文様となると考えられる。口縁～胴部に連続する資料がないために文様の展開や構成については不明である。

ⅲ類(第11図14)　口縁部に沈線と円形の刺突の施された縦位の弧状隆帯が認められるもの

口縁部には縦位に弧状の隆帯が貼付され、その上端と下端に円形の刺突を施している。さらに隆帯の中央には沈線が施されている。

胴部文様は、口縁～胴部に連続する資料がないために不明である。

地文には縄文(ＬＲ)が施文されている。

C類：口縁部に隆起線、沈線がめぐらないもの

C類はイ類：口縁部に文様帯のあるもの、ロ類：口縁～胴部に連続する文様帯のあるものとに分類される。

イ類(第11図15)　口縁部に文様帯のあるもの

口縁部には、横位の楕円文が認められる。この横位楕円文は、口縁部を連続してめぐると考えられる。口唇部には斜位の刻目が施されている。

胴部は縦位に展開する沈線が施されている。しかし、本資料が小破片のために文様の展開や構成については不明である。また、地文についても不明である。

ロ類(第11図18)　口縁～胴部に連続する文様帯のあるもの

大波状突起を有する口縁部をもつ。口縁～胴下部にかけて、三段の「U」字状の磨消縄文手法によって磨消された磨消帯が下垂し、その中央に「S」字状連結文が下垂する。文様の配置等から推定して、「S」字状連結文は、波状突起間の中央に配置されると考えられる。

地文には撚糸文(L)が施文されている。

ＩC類(第11図20)　胴部から口縁部にかけて外傾、口縁部内反するもの

口縁部には二重の「U」字と、「U」字の中央に縦位の洗線を施したものが認められる。これらの文様が繰り返されて口縁部を一巡すると考えられる。

胴部は沈線が下垂しているが、胴下部が破損しており、文様の展開や構成については不明である。

地文には撚糸文(ℓ)が施文されている。

ＩD類：胴部から口縁部にかけて内彎するもの

ＩＤ類はＩD1類：胴部から口縁部に無文帯のあるもの、ＩD2類：口縁部に文様のあるものとに分けられる。ＩD1類はさらにａ・ｂ類、ＩD2類もａ・ｂ類に分類される。

ＩＤ１類：口縁部に無文帯のあるもの

ａ類：無文帯を画するものが隆起線のもの

ａ類はさらにイ～ニ類に分類される。

イ類(第12図1・2)　刻目のある隆起線がめぐるもの

口縁部無文帯下に刻目のある隆起線がめぐっている。隆起線は、突起を形成している部分では突起にまで延びている。

胴部文様については、口縁～胴部に連続する資料がないために不明である。

ロ類(第12図3・4)　鍔状の隆起線がめぐるもの

口縁部無文帯下に鍔状の隆起線がめぐっている。

胴部文様については、口縁～胴部に連続する資料がないために不明である。

ハ類(第12図6)　貼リ付け痕の明瞭な隆起線がめぐるもの

口縁部無文帯下には貼り付け痕の明瞭な隆起線をもっている。隆起線は、突起を形成している部分では突起にまで延びる。突起下には鉤状沈線が見られる。

胴部文様については、口縁～胴部に違統する資料が少ないために不明である。

ニ類(第12図7)　丁寧な調整の施された隆起線がめぐるもの

口縁部無文帯下には丁寧な調整の施された隆起線がめぐっている。口縁部には突起を有し、突起上面には凹が見られる。突起にはさらに貫通孔が穿たれる。

突起下には三条の沈線が下垂しているが、胴部は大半が破損しているために全体の文様の展開や構成については不明である。沈線間は磨消されており、磨消縄文が認められる。

地文には縄文(ＬＲ)が施文されている。

ｂ類(第12図9)　無文帯を画するものが沈線のもの

口縁部には突起が付くと考えられる。胴部には磨消縄文手法による広い磨消帯が見られる。磨消帯には鉤状沈線が施されている。

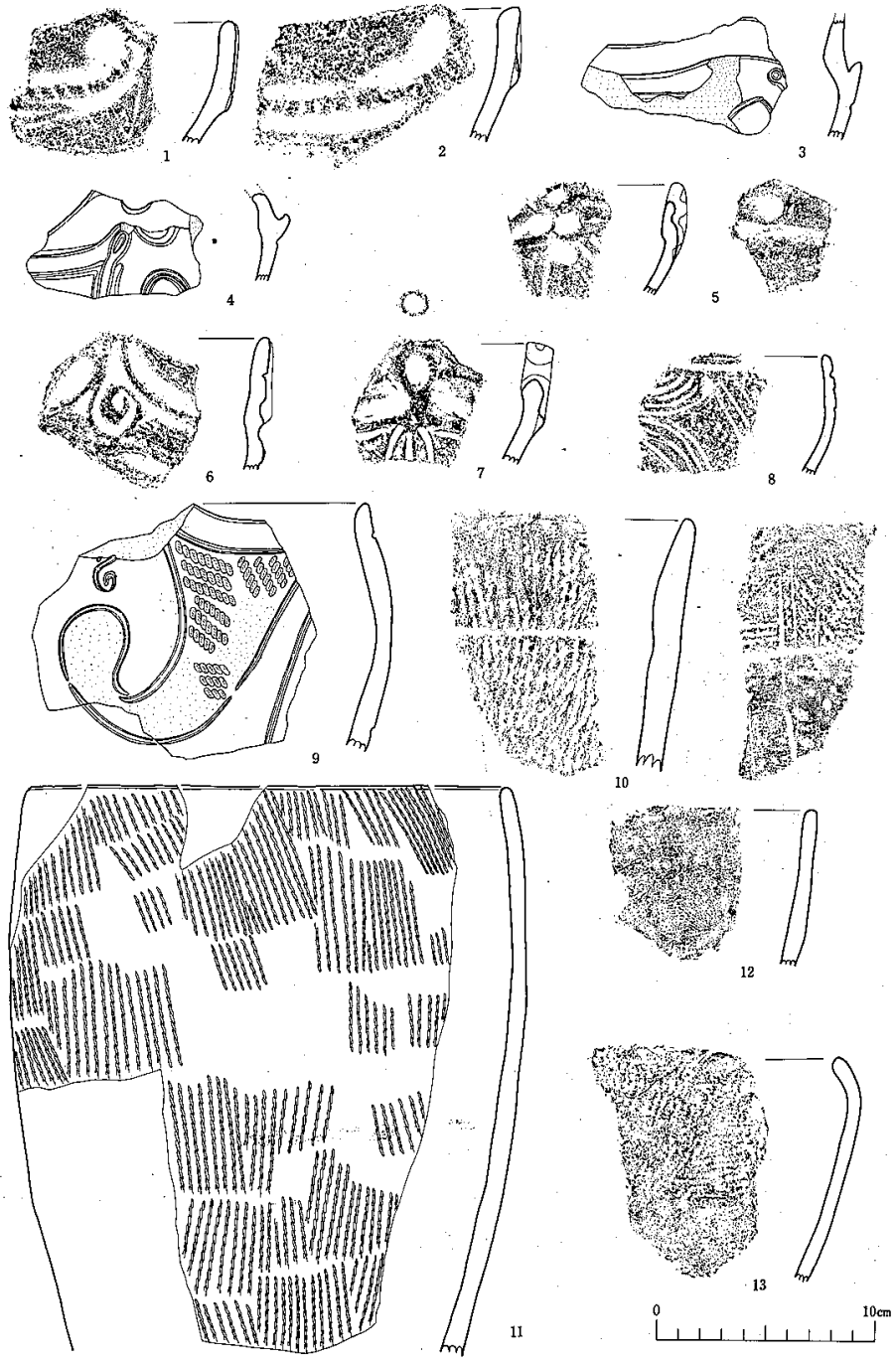
地文には縄文(ＲＬ)が施文されている。

ＩD2類：口縁部に文様のあるもの

ａ類(第12図5)　口縁部に溝状沈線がめぐるもの

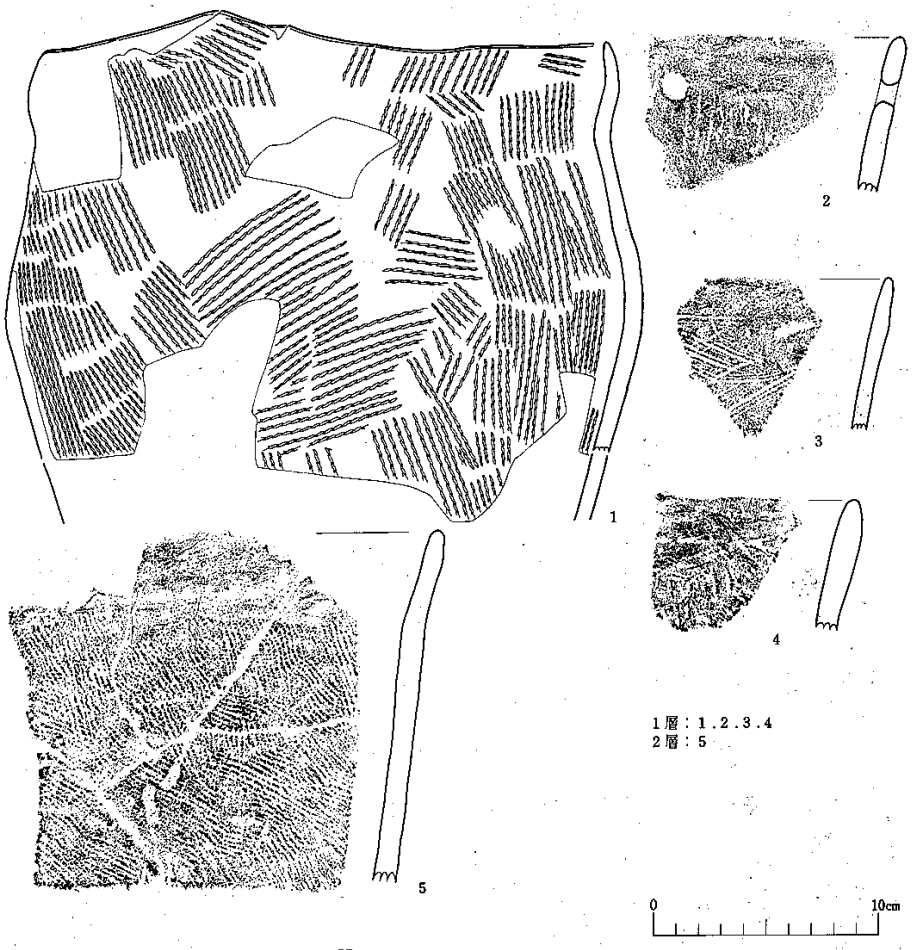
口縁部に突起を有し、突起には縦位の三個の盲孔が見られる。また、突起の左側にも盲孔が見られ、盲孔と溝状沈線は連結している。

胴部文様については、口縁～胴部に連続する資料がないために不明である。また、地文につ



第12図　第 二 群 土 器

1層：1.3.4.8.13
2層：5.6.9.11.12.14
3層：2.7
4層：10



第13図　第　二　群　土　器

いても不明である。

この類は、口縁部内面上端に粘土紐を貼付することによって造り出された段が見られ、ＩＡ１ｂ類、ＩＢ2ｂロ類と共通点を見い出すことができる。

ｂ類(第12図8)　口縁部に沈線がめぐるもの

口縁部上端に沈線がめぐっている。沈線下には、数条の沈線によって描かれた曲線文様が展開している。沈線間は磨消され、磨消縄文が認められる。

地文には縄文(ＬＲ)が施文されている。

Ⅱ：文様のないもの

これらは、地文の施文される範囲によってA類：口縁～胴部まで地文が施文されるもの、B類：胴部に地文が施されるものに分類される。

ⅡA類(第12図10～13、第13図1)　口縁～胴部まで地文が施文されるもの

地文には、縄文(ＬＲ：第12図13)、撚糸文(Ｌ：第12図10、Ｒ：第12図、12、第13図1)が施文されている。第12図10は、内面にも撚糸文(Ｌ)が施されており、さらに縦位の沈線も施されており興味深い。

口縁部は、平縁のもの(第12図10～13)と波状口縁のもの(第13図1)とがある。胴部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの(第12図10、12)、胴部から口縁部にかけて内彎するもの(第12図11、13)、胴部で膨らみ、頸部で屈曲し口縁部内彎するもの(第13図1)などがある。

ⅡB類(第13図2～6)　胴部に地文が施文されるもの

口縁部は研磨されており、胴部には地文のみが施されている。

地文には、撚糸文(Ｒ：第13図2、4、5)、くし目状沈線文(第13図3)などが施文されている。

口縁部はいずれも平縁で、胴部から口縁部にかけて外傾する器形である。

浅鉢形土器(第14図1)

1点出土しており、完形品である。胴部で膨らみ、頸部でわずかに屈曲し、口縁部は外反する器形で、口縁端は内傾している。底部は平底で、ミガキが施されている。

口縁部には八つの波状突起を持ち、それぞれの突起には、二個の円形の盲孔とそれに挟まれた四～六条の縦位の沈線が施されている。突起の左右にある円形の盲孔は、沈線によって連結されている。

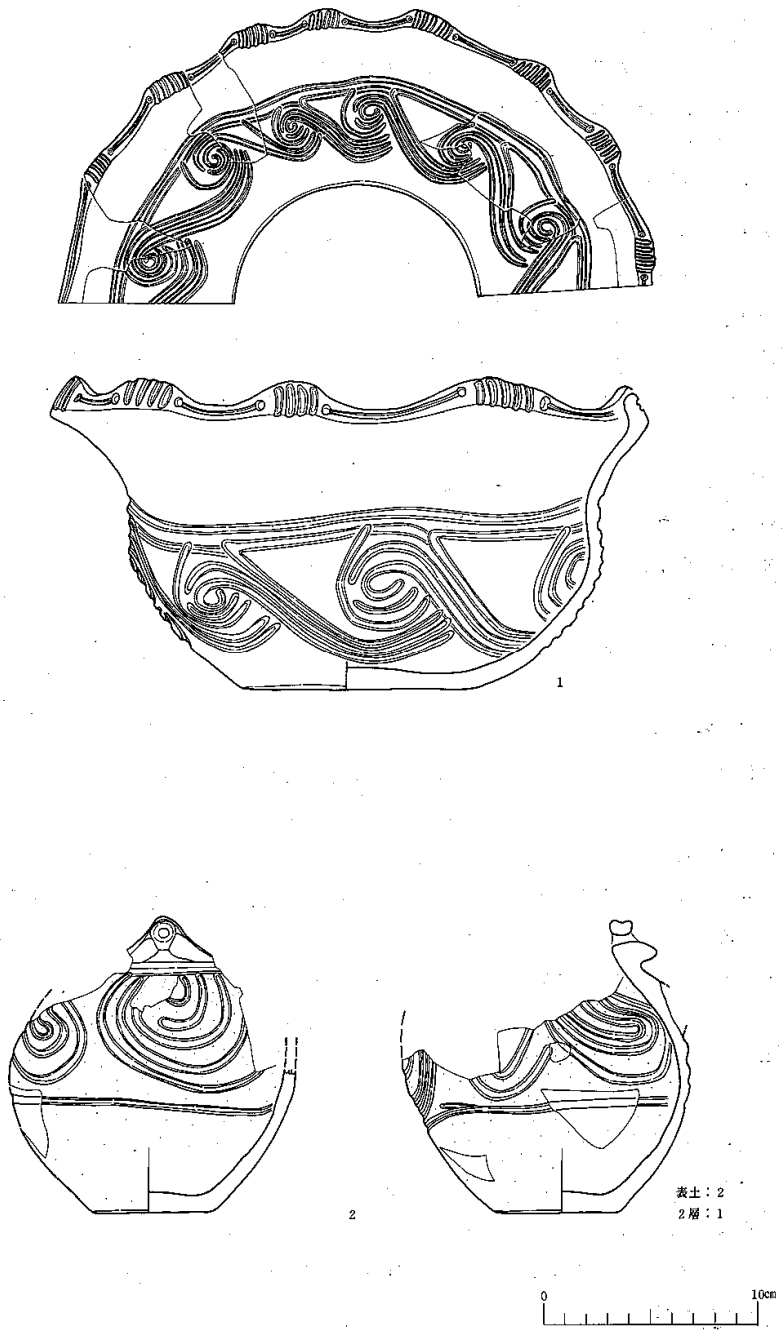
口縁～頸部にかけては無文帯となっており、頸部には一条の沈線がめぐる。

胴部には二～三条の沈線によって六つの渦巻きが形成され、それが横に延びて入組文状に連結し合う。地文は認められない。

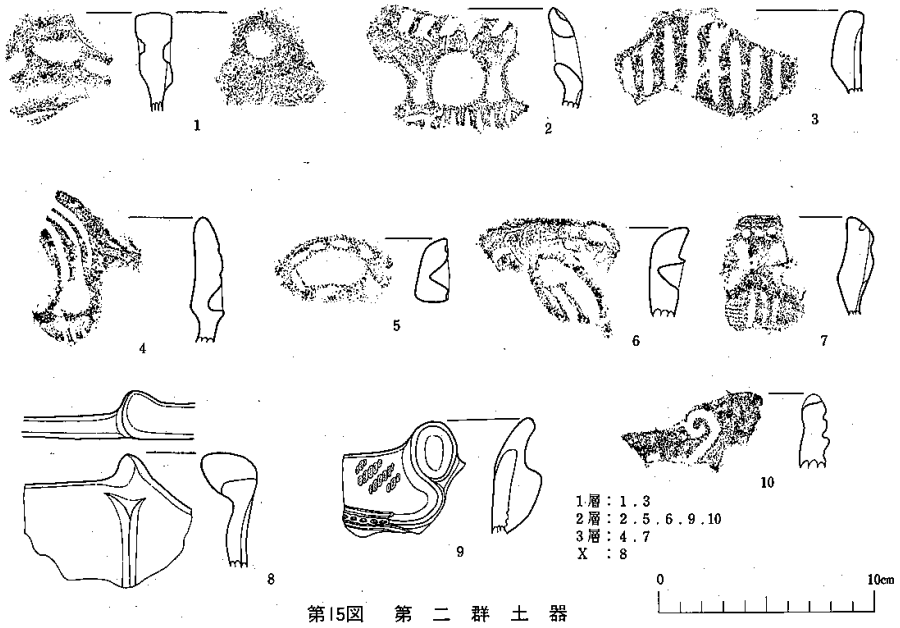
壺形土器(第14図2)

1点出土している。口縁部の大半を欠き、貫通孔のある突起のみ残存している。胴部は球形に膨らんでいる。注口土器の可能性がある。

頸部から胴部にかけて沈線により、横位に展開する曲線文様が描かれている。摩滅が激しく、地文の有無は不明である。



第14図　第 二 群 土 器



第15図　第二群土器

〔口縁部突起〕（第15図）

第二群土器の口縁部に付くものと考えられる。盲孔や貫通孔を有しているものが多い。9には口縁部をめぐる隆起線に刺突が施されている。

〔胴部資料〕

胴部資料の分類にあたっては、文様表現技法と文様展開を主な分類基準とした。

a類(第16図1～3)　連鎖状浮線文の見られるもの

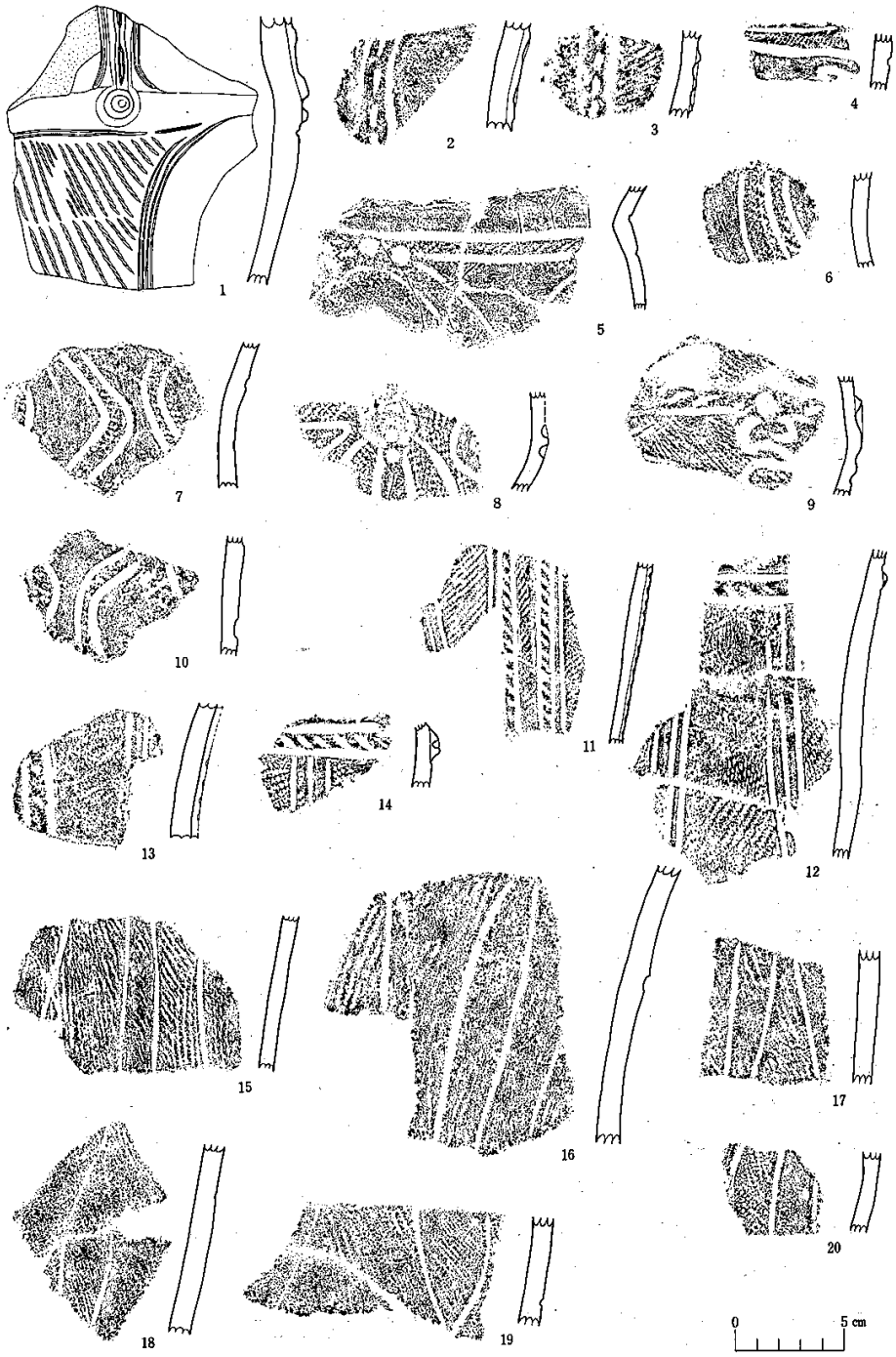
いずれも縦位の隆起線に刺突が施され、連鎖状浮線文状になっている。第16図1は、隆起線を挟んで左右に沈線が施され、さらにボタン状貼付文が下端に付く。胴部には磨消縄文手法による磨消帯が見られる。

地文としては、縄文(LR：第16図3)撚糸文(R：第16図1)が施文されている。

b類(第16図4～8・10)　胴部文様が縄文帯で描かれるもの

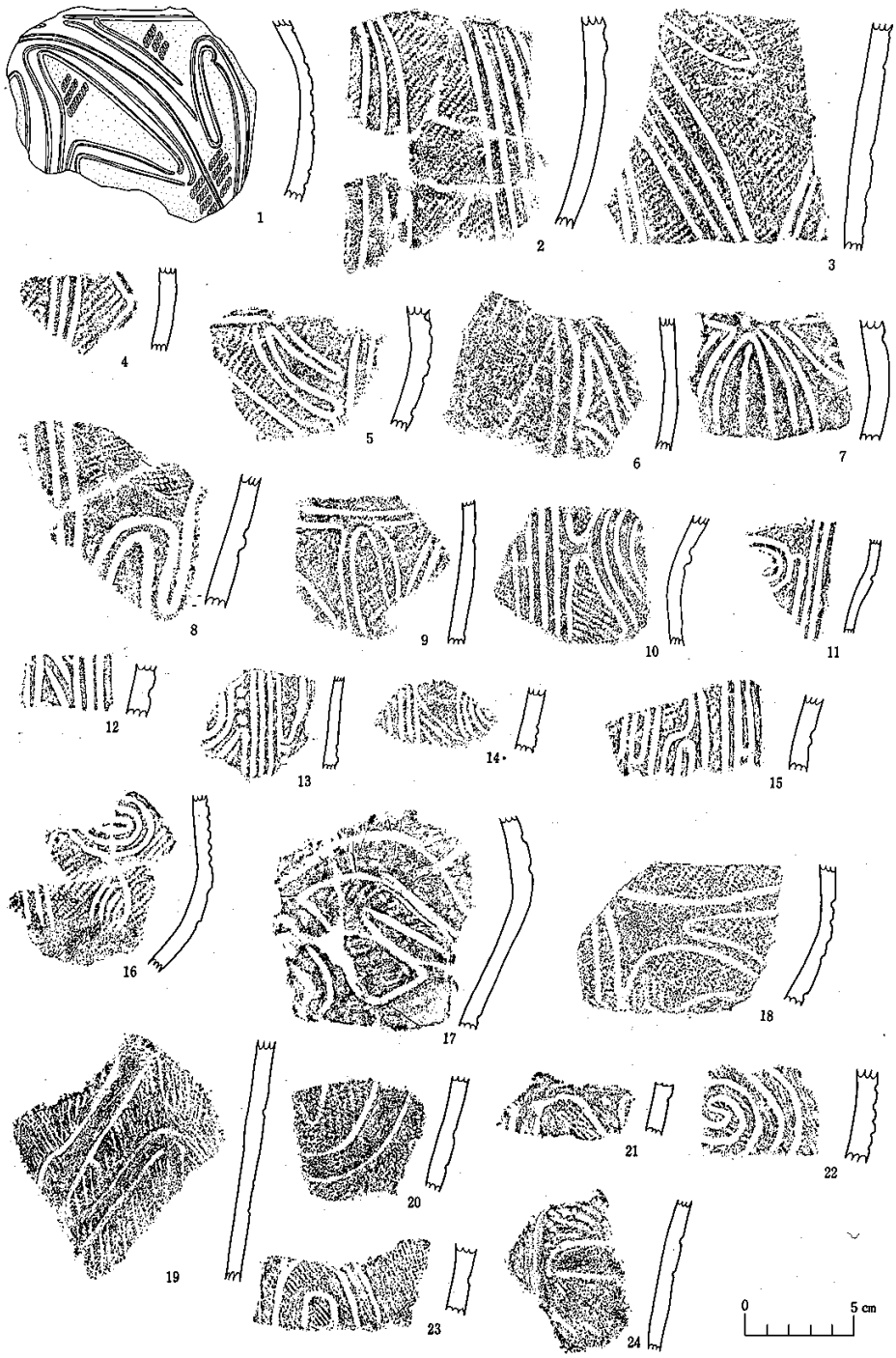
縄文帯によって体部文様が描かれているものである。文様は、胴部全体に自由に展開して描かれる。第16図5・8は、一～二個の円形の盲孔を文様の起点としている。

地文としては、b類土器すべてに縄文(LR)が施文されている。



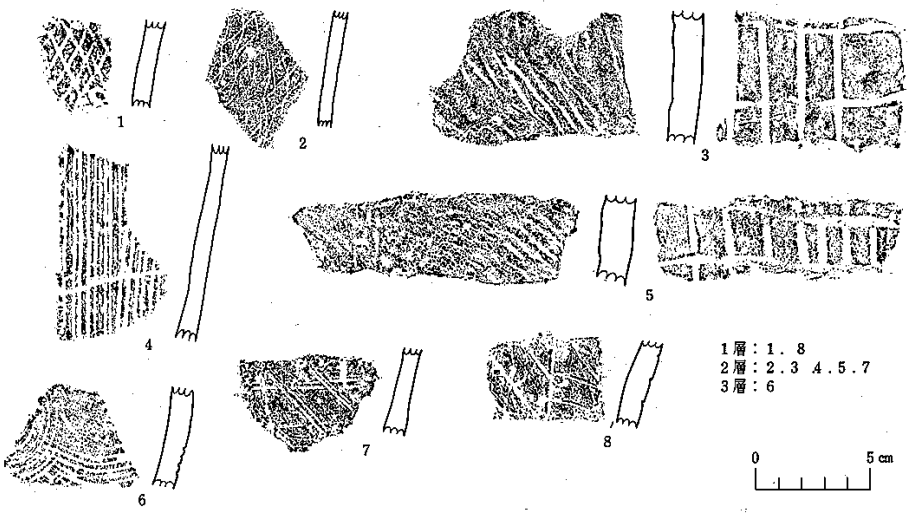
第16図　第 二 群 土 器

1層：9.15.20
2層：2.3.4.7.8.10.12.14.17
3層：1.5.11.13.16.18
4層：6
X　：19



第17図　第 二 群 土 器

表土：9.22
1層：6.11.13.16
2層：1.2.4.5.7.8.10.14.15.17.18.20.21.23.24
3層：3.12
X　：19



第18図　第　二　群　土　器

C類(第16図9・11～14)　刻目を有する隆起線をもつもの

隆起線には、横位のもの(第16図9・12・14)と縦位のもの(第16図11：13)とがある。刻目はいずれも斜位に施されている。第16図9は、隆起線の上に円形の刺突文を有し、その直下には連続S字文が施文されている。第16図12・14は、横位の隆起線下に三条の沈線が一つの単位となり下垂している。沈線間は磨消され、磨消縄文が認められる。

地文としては、縄文(LR：第16図11～14)、撚糸文(R：第16図9)が施文されている。

d類(第16図15～20)　磨消帯が下垂するもの

第16図18・19には、連鎖文が見られる。いずれも磨消縄文手法による幅広い磨消帯が下垂している。

地文の判明するのは5点であり、縄文(RL：第16図16、LR：第16図20)、撚糸文(R：第16図15、19、ℓ：第16図18)が施文されている。

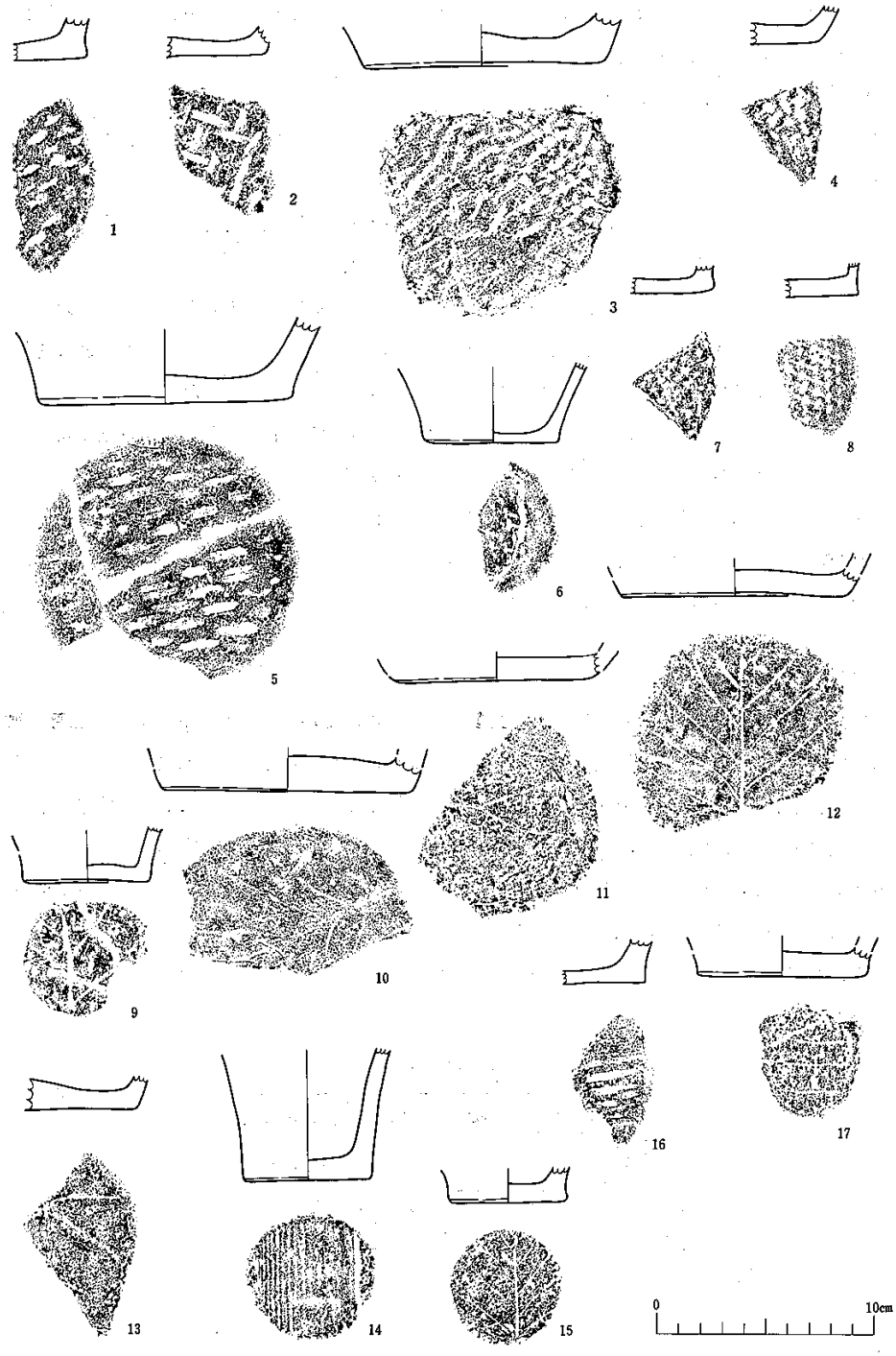
e類(第17図1～16)　数条の沈線によって文様が描かれるもの

縦位に展開する数条単位の沈線の間に渦状文(第17図11・14・16)や円形の刺突文(第17図13)が配され、沈線間の空間を埋めている。沈線間は磨消されており、磨消縄文が認められる。

地文が判明しているのは12点であり、縄文(LR：17図1～5・7～9・11・15・16、RL：第17図10)が施文されている。

f類(第17図17～24)　胴部文様が磨消帯で描かれるもの

磨消縄文手法による磨消帯が縦位、横位に展開し、斉一性のない文様が描かれている。



第19図　第 二 群 土 器

いずれも地文が判明しており、縄文(LR：第17図17、18、20・24)、撚糸文(R：第17図19・21・22、ℓ：第17図23)が施文されている。

g類(第18図)　地文のみのもの

地文としては、縄文(LR、RL)、撚糸文(R・L・ℓ・r)などが多用されるようである。しかし、これ以外にも量的には極めて少ないが次の様な地文も見られる。

1・2は、網目状撚糸文である。1が撚糸文(ℓ)、2が撚糸文(R)である。2は、非常に細い原体を使用している。3、5は同一個体と考えられる。外面には撚糸文(ℓ)が施文されている。内面には、横位と縦位の沈線によって縦長の格子目状の文様が描かれている。この2片以外は出土していない。4・6・7にはくし目状沈線が見られる。4は縦位に下垂し、6は曲線を描く。7は斜格子状になっている。8には縦位、斜位に施された条線が見られる。

これら胴部資料は、小破片のために全体の文様構成については不明であるが、復元資料・口縁部資料に含まれると考えられるものもある。胴部資料a類は復元資料・口縁部資料のⅠB1a類に、胴部資料C類は復元資料・口縁部資料のⅠB2aイ類に、胴部資料d類は、胴部資料口縁部資料のⅠB1aⅱ類に含まれると考えられる。なお、それ以外の胴部資料については、復元資料・口縁部資料との関係は不明である。

〔底部資料〕(第19図)

底部は合計215点出土している(第1表参照)。小破片のため不明のものもあるが、底部形態の判明するものはいずれも平底である。また胴下部から底部へ至る部分の形態では、胴下部からそのまま屈曲して底部に至るものと、胴下部が若干張り出すものとがあり、前者が多い。

底面にみられる調整・圧痕では、ミガキの施されるものが最も多く、網代痕(1～8、16)木葉痕(9～13、15、17)、ケズリのものが若干認められる。なお14は、平行する圧痕がみられるものであるが、その種類は明らかでない。

これらの底部資料の大部分は、量的に最も多い第2群土器に伴うものであろう。

第Ⅰ表底部集計

		1 層	2 層	3 層	4 層	地点不明	計
平底	網代痕	5	7	5	1		18
	木葉痕	2	4	4	1		11
	ミガキ	16	56	19	1	13	105
	ケズリ			1			1
	不明	8	2	19		7	36
不明		10	13	12	2	7	44
計		41	82	60	5	27	215

〔年代〕

これら第二群土器は、僅かに表土出土土器や出土地点不明の土器が含まれているが、遺物包含層から主体的に出土しているものであり、器形・文様の特徴から、縄文時代後期前葉南境式(伊東:1957)に比定される。

〈第三群土器〉（第 20 図）

器形・文様の特徴

出土遺物は極めて少なく、いずれも小破片である。1～4は深鉢形土器の口縁部、第20図5は壺形土器の胴部と考えられる。1～3は口縁部が外傾するもので、口縁部内面には一条の沈線がめぐっている。1は口縁部に工字文が認められる。2は口縁部に平行沈線がめぐっている。3は口縁部に四本の平行沈線がめぐっており、胴部には文様がなく地文のみである。

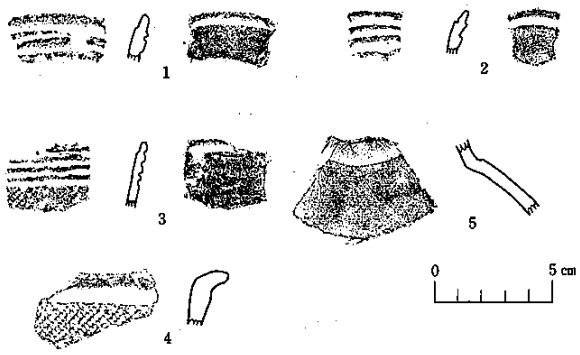
4は頸部で屈し、口縁部は外反気味になる器形である。頸部には段が認められる。口縁部は無文である。胴部には文様がなく地文のみである。

5は全面にわたって研磨されている。

地文の判明しているのは、2点のみ(3、4)である。いずれも縄文(ＬＲ)が施文されている。

〔年代〕

これらの土器はいずれも表土から出土しているものである。1は口縁部に工字文が認められることから縄文時代晩期末葉大洞A式(山内：1930)のものと考えられる。2～5は、巻堀遺跡(一迫町教委：1977)出土土器に類例が見られ、縄文時代晩期後半に位置づけられている。

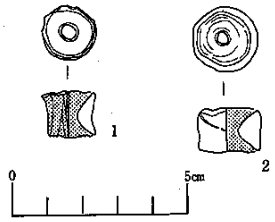


第20図　第 三 群 土 器

(2) 耳飾(第21図1・2)

2点出土しており、ほぼ完形に近い。滑車状耳飾である。

1は、上面外径が1.6cm、下面外径が1.4cm、高さ1.4cmである。内径は0.45cmである。中央部はわずかにくびれている。全面朱彩で、外面には縦方向のヘラミガキ、内面にはナデ痕が認められる。



第21図　耳飾

2は、上面外径・下面外径とも1.8cm、高さは1.3cmである。内径は、0.3cmである。中央部は1ほどではないがわずかにくびれている。外面は摩滅が激しく調整は不明であるが、内面にはナデ痕が認められる。内面にのみ朱彩が認められるが、本来は外面にも朱彩が施されていたものと考えられる。

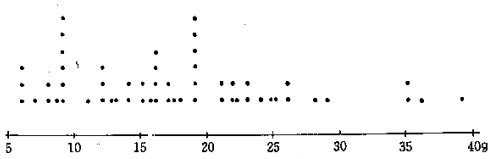
(3) 円板状土製品(第 23 図)

合計 56 点出土している。土器片を円形に加工したものである。

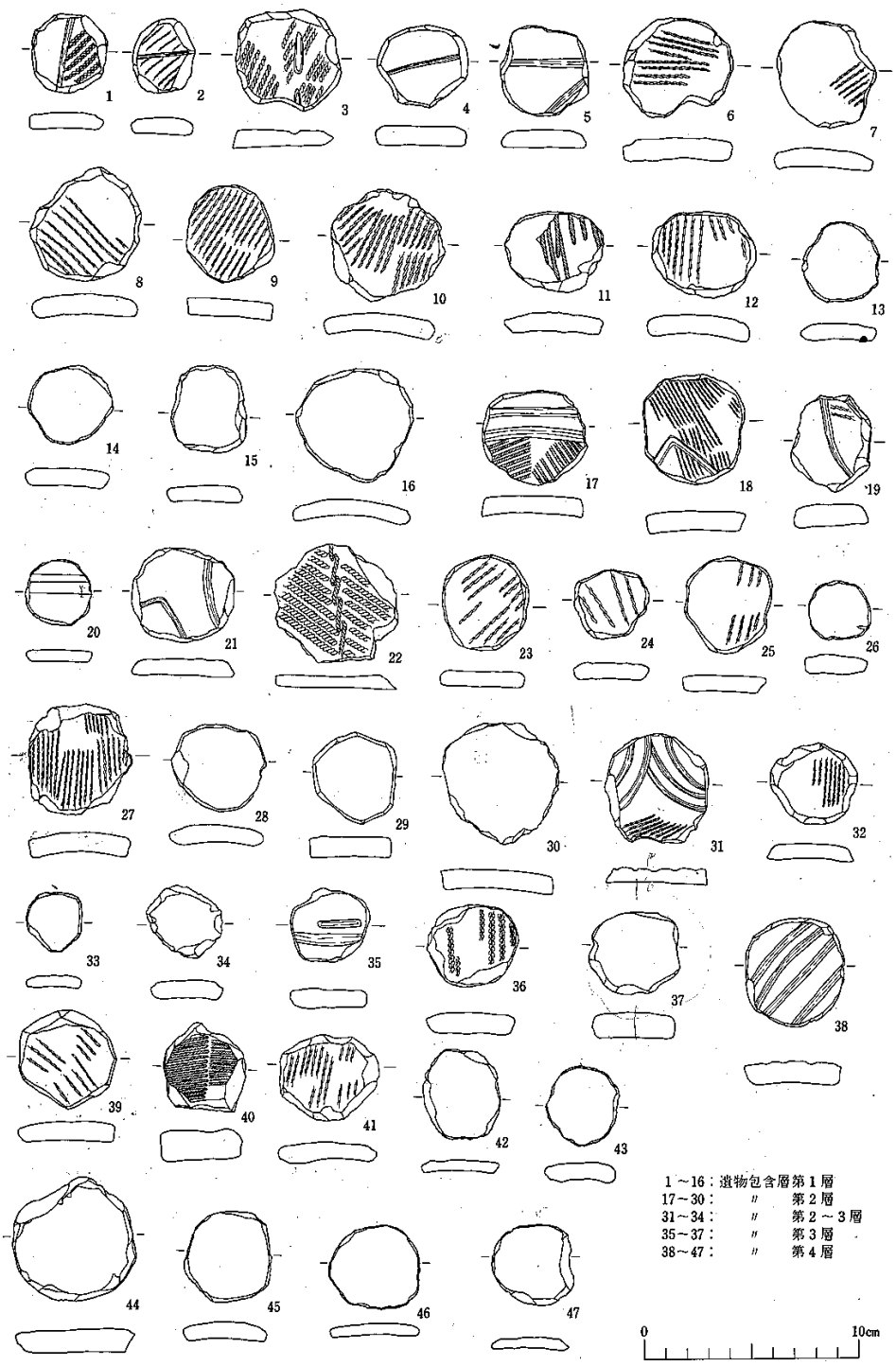
平面形は不整円形のものと楕円形のものとがあるが、いずれも円形を基調としている。56点中、底部破片を使用しているのは1点であり、その他はすべて胴部破片である。56点ともその周縁を敲打調整によって丸く仕上げている。敲打調整後、周縁を研磨しているものも見られるが、摩滅のために不明のものが多い。

大きさは最大のもので5.88cm×5.31cm、最小のもので3.15cm×3.12cmである。第22図は重量分布図である。重量について見ると最大のもので39.4g、最小のもので6.2gである。大きさや重量とも限られた範囲の中におさまっているが、その中でもバラエティが認められる。

使用痕跡については認められなかった。



第22図　円板状土製品重量分布図



第23図　円板状土製品

2 石製品

石製品には、(1)剥片石器、(2)石核、(3)磨製石斧、(4)凹石、(5)磨石、(6)石皿がある。

(1)剥片石器

本遺跡からは、石鏃、石錐、石匙、不定形石器などが出土している。

石鏃(第 24 図 1、2)

2 点出土している。第 24 図 1 は完形品である。a 面の左側縁中央がわずかに張り出しており左右非対称である。基部はわずかに凹んでいる。第 24 図 2 は尖頭部が破損している。基部にはえぐりがなく平坦である。

石錐(第 24 図 3～5)

3 点出土している。第 26 図 3、5 は錐部先端を欠いており、第 24 図 4 はつまみ部を欠いている。第 24 図 3 はつまみ部全面に調整が施されているが、第 24 図 5 は一部のみを調整している。

石匙(第 24 図 6・7)

2 点出土している。第 24 図 7 は完形品であり、第 24 図 6 は刃部が欠損している。第 24 図 7 は a 面両側縁に刃部を持っている。刃部先端には、自然打面が残っている。

不定形石器(第 24 図 8～20、第 25 図)

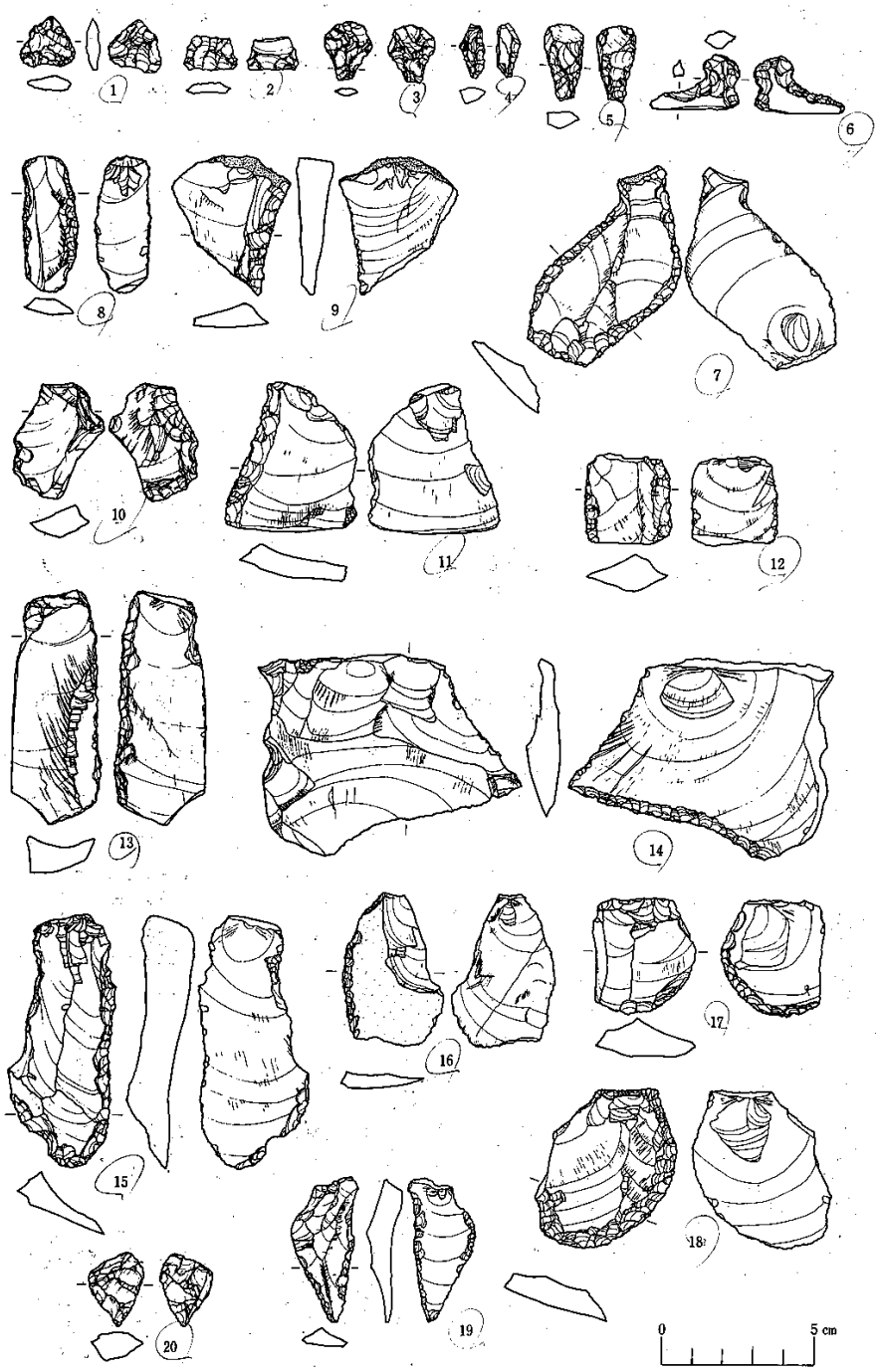
剥片に調整剥離を施して刃部を形成しているものである。合計 34 点出土しており、完形品 16 点、破損品 18 点である。第 24 図 20、第 25 図 23・24・30・31 は調整剥離が全周に施されているが、その他は周縁の一部に限られている。第 24 図 17・19・20、第 25 図 23・24・27・30・37・38 は両面加工が施されている。その他のものは片面加工が施されている。片面加工のうち第 24 図 10・13・14・17、第 25 図 32 は腹面にだけ調整剥離が加えられている。

刃部には使用による磨耗痕の認められるのもある。

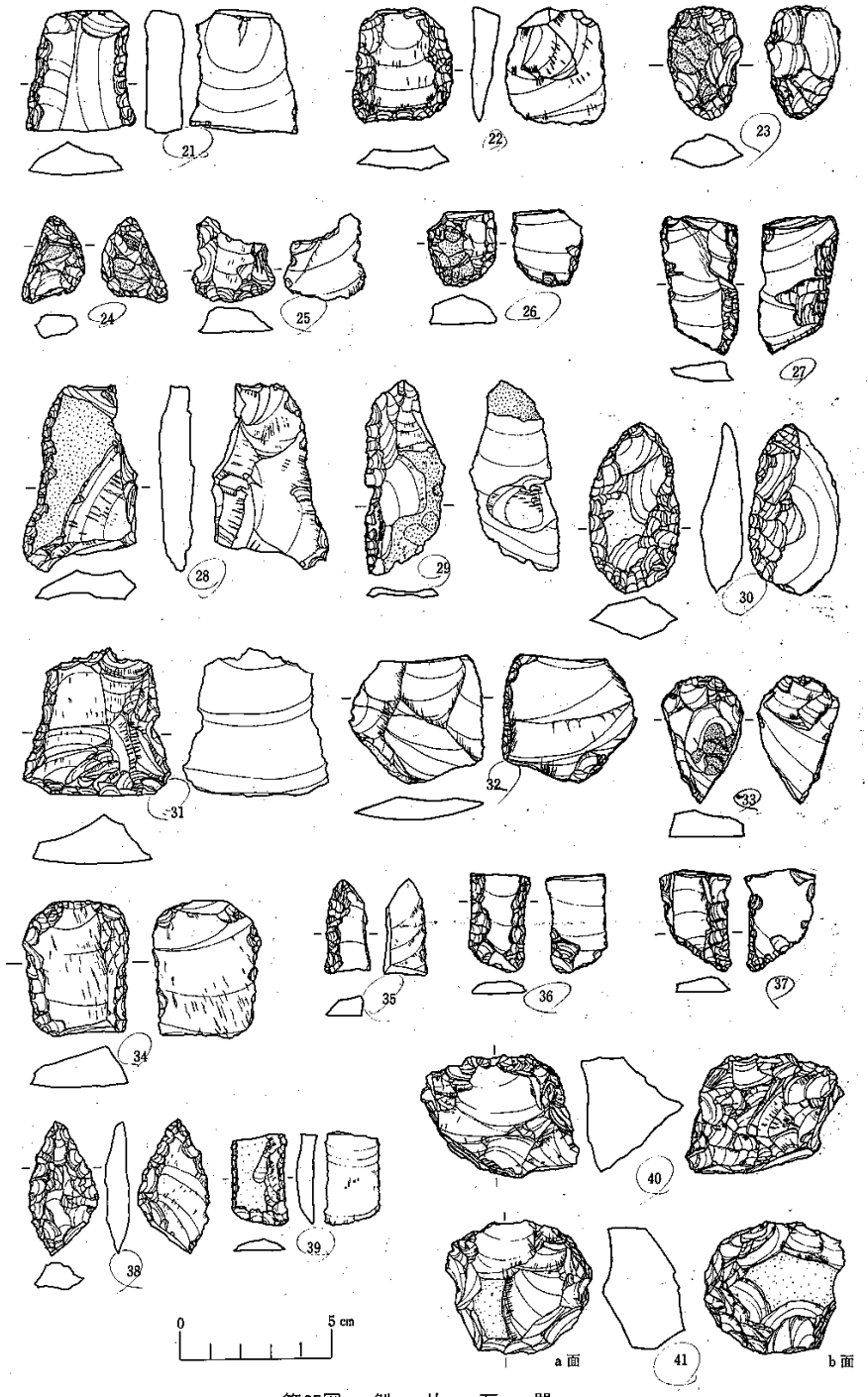
(2) 石核(第 25 図)

2点出土している。40は、周縁に細かな調整の剥離を加えたのちに大きな剥離を剥取し、次にその剥離面を打面として剥離が行なわれる。剥離が困難になると、約90° 打面を転位して別の剥離がなされている。

41はａ・ｂ両面に自然面を残している。剥離の順序は、まずｂ面側に剥離を加えて全周させたのちに、そこを打面として、ａ面側で順に剥離がなされている。



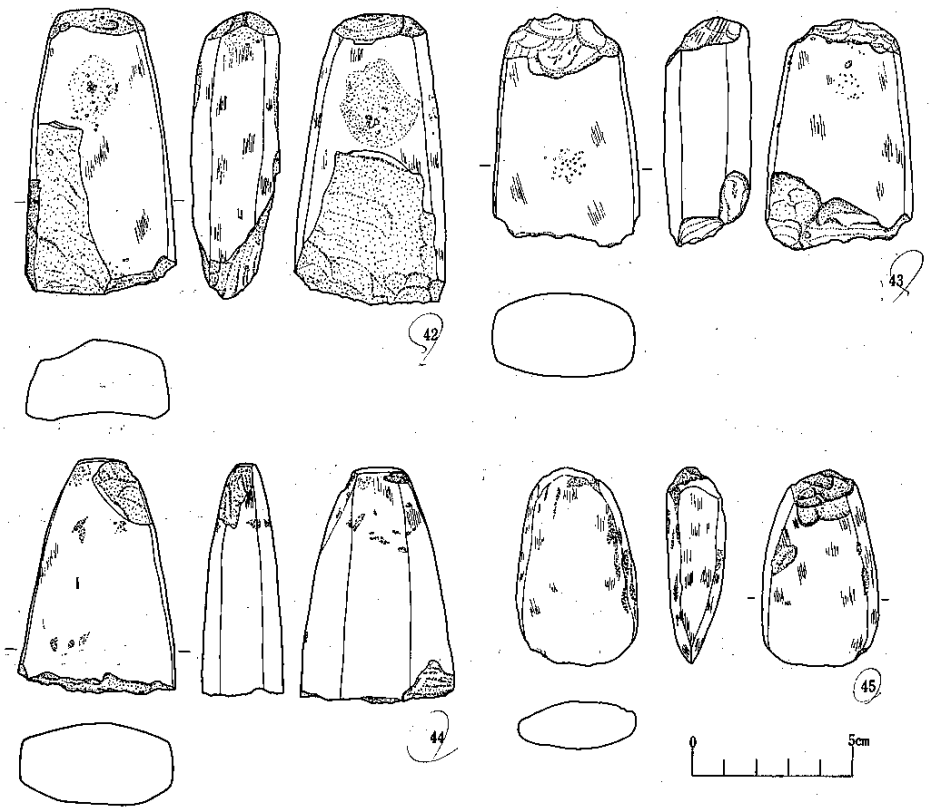
第24図　剝　片　石　器


21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
a面
b面
0
5 cm

第25図　剝　片　石　器

(3) 磨製石斧（第26図）

完形品1点、破損品3点の合計4点出土している。1～3は胴部の横断面形はふくらみをもつ長方形で、四隅に稜がつく。4は他の3例と比較すると小形である。胴部の横断面形は側縁が丸味を持つ長方形である。



第26図　磨　製　石　斧

(4) 凹石(第27図、第28図)

完形品13点、破損品7点の合計20点が出土している。

平面形・断面形を完形品から観察すると楕円形のものが圧倒的に多い。第28図18は平面形が円形で、第27図6は不整楕円形である。

大きさは最大のもので15.8cm(最大長)×12.9cm(最大幅)であり、最小のもので7.1cm(最大長)×7.0cm(最大幅)である。重量は完形品について見ると最大のものが2300g、最小のものが250gであり、最小のものは、最大のものの約10分の1である。第29図に示したように最大のものを除くと大きさ・重量とも一定の範囲におさまる。

凹部の平面形は円形のもの、楕円形のもの、不定形のものなどがあるが、楕円形のものが多い。楕円形のものの中には、小孔の集合によって楕円形になっているものが多い。不定形のものは、いずれも小孔が不規則に分布しているものである。

凹部の断面形は、V字状のもの、U字状のもの、皿状のもの、不規則な凹みのものなどがあるがU字状または、皿状のものが多い。第28図15のようにU字状の凹が深いものもあるが、凹の浅いものがほとんどである。

凹部の位置は上面だけのもの、上・下両面にあるもの、上・下両面と側面にあるものなどがあるが、上・下両面にあるものが多い。第27図4は上・下両面の他に側面にもある。第27図5は下面は破損のために不明であるが、上面の他に側面にも凹が認められる。

凹の数を各々の面において見ると少ないもので1個、多いもので7個認められる。2個以上見られるものが多い。

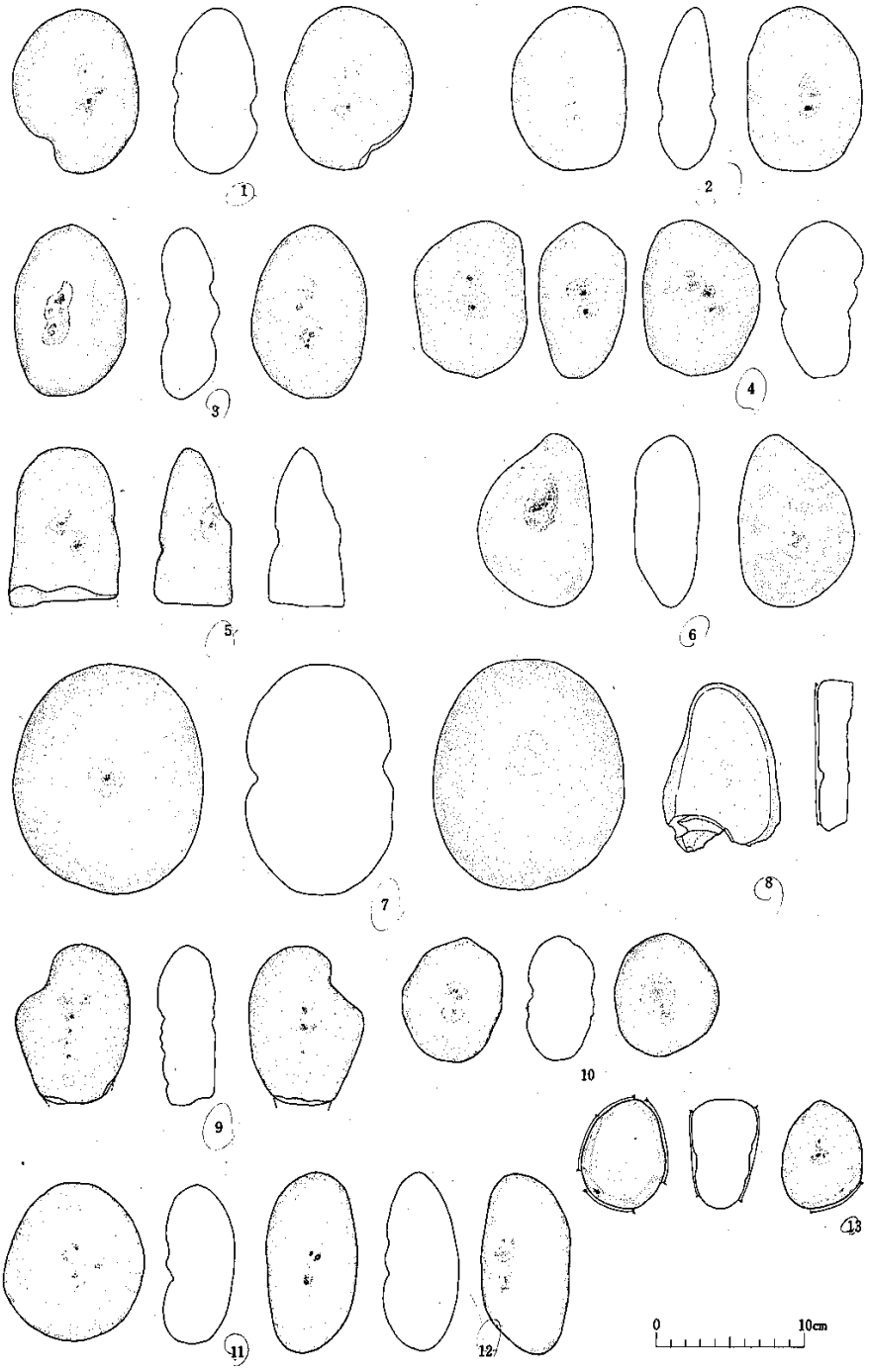
第27図8・13、第28図19・20には、凹部の敲打痕以外に磨面を有している。また、第27図14～16・19は凹部の敲打痕の他に側縁部や下端に敲打痕が認められ、多目的に使用されたと考えられる。

(5) 磨石(28図21)

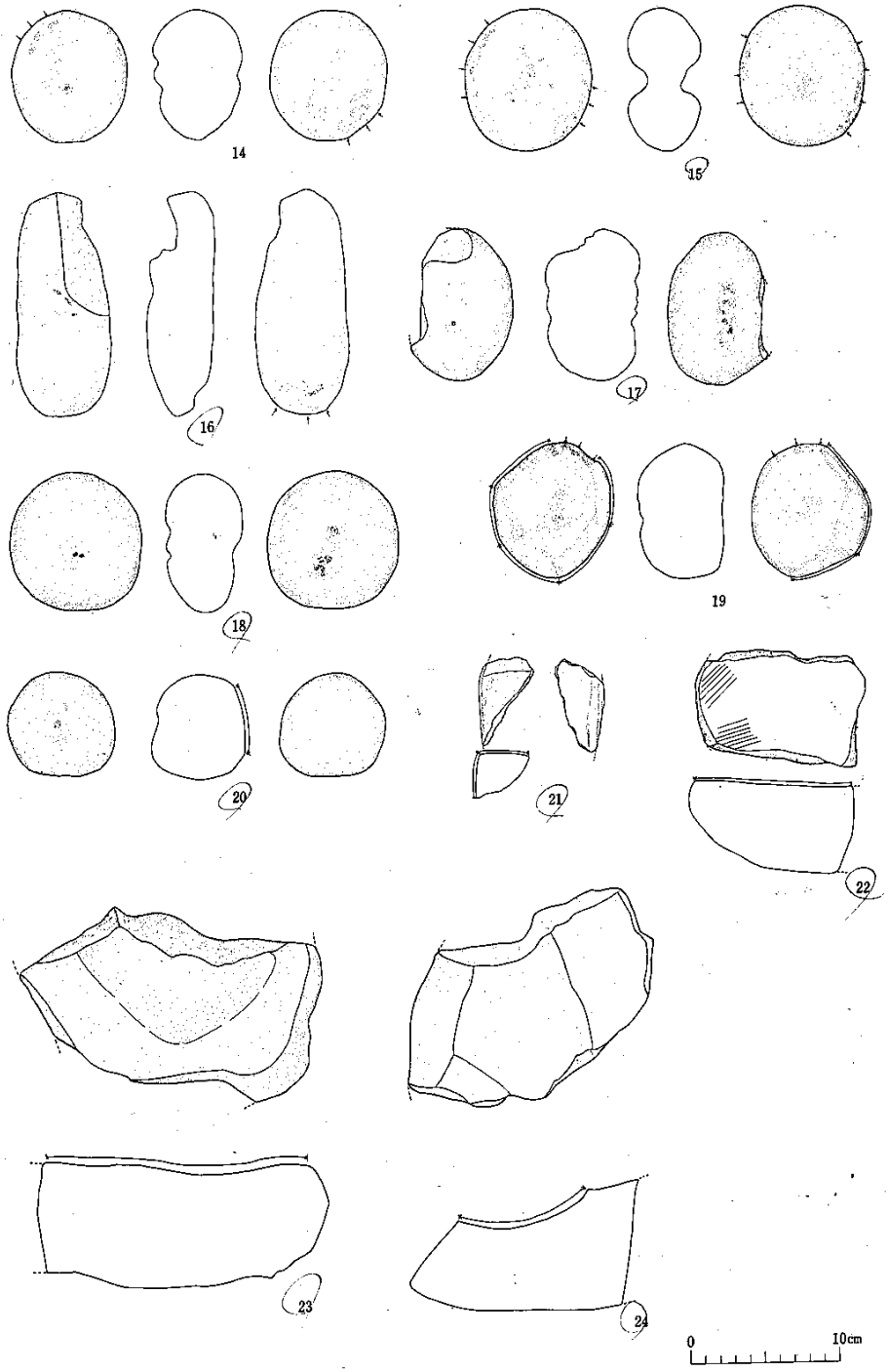
1点のみ出土している。石器の大半は破損のためにない。石器の上面及び側縁に磨面が観察され、その部分は平坦な面になっている。

(6) 石皿(第28図22～24)

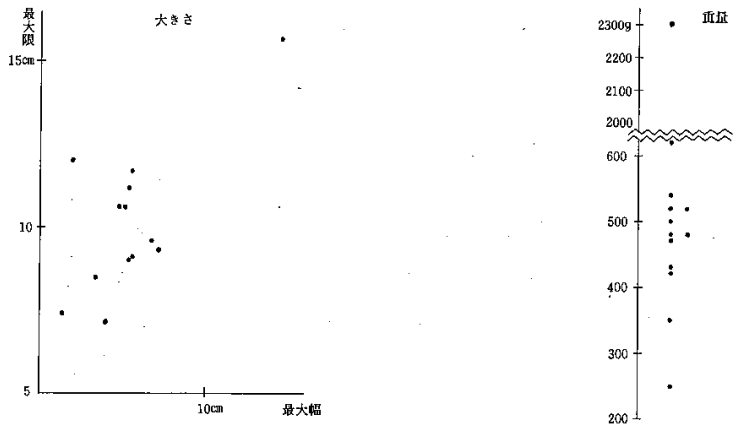
3点出土している。いずれも不定形のもので破損品である。また、上面には明瞭な磨面がある。第28図22には擦痕が観察される。



第27図　凹　　石



第28図　凹石、磨石、石皿



第29図　凹石の大きさと重量
（完成品から作製）

石　錐

図版	地区—層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材
1	6区A－3	15.9	17.5	4.75	1.3	珪　質　頁　岩
2	5区A-2～3	(16.8)	11.1	(2.7)	(0.7)	珪　質　頁　岩

石　錐

図版	地区—層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材
3	5区B－1	(19.3)	15.0	(4.0)	(0.9)	珪　質　頁　岩
4	4区A－3	(18.2)	(8.0)	(6.7)	(0.8)	珪　質　頁　岩
5	4区A－2	(25.5)	12.5	(6.3)	(1.7)	珪　質　頁　岩

石　匙

図版	地区—層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材
6	X　－　X	(29.1)	(17.9)	(7.3)	(3.2)	珪　質　頁　岩
7	6区B－3	67.0	33.4	判.0*	(2.5)	珪　質　頁　岩

不定形石器

図版	地区—層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材
8	表　土	(45.0)	16.9	7.2	(5.5)	珪　質　頁　岩
9	4区B－2	48.1	(37.0)	10.1	(4.15)	珪　質　頁　岩
10	6区A－2	(38.2)	24.8	8.85	8.88	珪　質　頁　岩
11	5区A－1	49.0	41.8	8.0	17.45	珪　質　頁　岩
12	4区B－1	(28.5)	(28.2)	(12.4)	(11.65)	珪　質　頁　岩
13	6区A－2	(77.4)	30.0	12.0	(32.22)	珪　質　頁　岩
14	6区A－1	85.0	66.7	13.5	74.65	珪　質　頁　岩
15	6区B－3	83.2	37.45	13.0	37.00	珪　質　頁　岩
16	X　－　X	51.5	32.0	4.8	7.9	珪　質　頁　岩
17	4区A－2	38.9	33.3	12.8	13.8	珪　質　頁　岩
18	5区A－2	52.4	41.6	12.3	29.8	珪　質　頁　岩
19	5区A－X	47.2	20.5	7.0	6.3	珪　質　頁　岩
20	X　－　X	24.15	18.0	9.8	3.2	珪質頁岩(一部玉すい質)
21	5区A－2	(40.4)	(36.2)	(11.6)	(21.6)	珪　質　頁　岩

図版	地区—層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材
22	5区A－4	37.75	32.3	7.7	10.5	珪　質　頁　岩
23	4区A－2	37.5	25.4	10.55	9.15	珪　質　頁　岩
24	4区A－3	29.8	17.8	8.2	4.0	珪質頁岩(一部玉すい質)
25	5区A－2	(28.8)	(27.0)	(8.5)	(5.98)	珪　質　頁　岩
26	土壌内堆積土	(24.3)	(22.8)	(12.0)	(6.9)	珪　質　頁　岩
27	6区A－2	(47.4)	(25.0)	(7.0)	(8.25)	珪　質　頁　岩
28	X　－　X	(63.35)	(37.4)	(10.8)	(23.2)	珪　質　頁　岩
29	4区B－1	(65.2)	(26.5)	(7.15)	(9.2)	珪　質　頁　岩
30	X区－　3	48.7	48.1	17.9	37.9	珪　質　頁　岩
31	6区B－2	56.3	30.0	13.9	22.5	珪　質　頁　岩
32	土壌内堆積土	(41.6)	44.7	(6.8)	(14.2)	珪　質　頁　岩
33	5区A－3	(42.3)	(24.6)	(8.7)	(10.25)	珪　質　頁　岩
34	4区B－2	(44.55)	(35.2)	(13.3)	(24.5)	珪　質　頁　岩
35	4区A－1	(31.8)	(15.0)	(7.1)	(3.25)	珪　質　頁　岩
36	4区B－1	(32.0)	(19.6)	(6.0)	(4.18)	珪　質　頁　岩
37	5区B－1	(35.7)	(23.2)	(7.9)	(5.6)	珪　質　頁　岩
38	5区A－1	(44.0)	(22.6)	(8.4)	(7.45)	珪　質　頁　岩
39	6区B－2	(30.7)	(17.85)	(4.7)	(3.15)	珪　質　頁　岩

石　核

図版	地区—層位	高さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材
40	4区B－2	40.9	56.45	34.4	58.2	黒　曜　石
41	5区B－2	48.0	46.5	26.7	64.0	珪　質　頁　岩

石　斧

図版	地区—層位	長さ(mm)	頭部巾(mm)	刃部巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材
42	X　－　X	(90.25)	(26.5)	——	(27.1)	(186)	石英安山岩質頁岩
43	X区A－4	(71.0)	——	——	(25.0)	(114.2)	石英　安山岩
44	5区B－2	(74.0)	(14.0)	——	25.5	(113.7)	蛇　紋　岩
45	4区A－1	(61.8)	——	36.5	17.75	(66.35)	角　閃　岩

凹　石

図版	地区—層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	凹の数 上面	側面	下面
1	X－1～3	112.0	85.0	57.0	(640)	石英安山岩	4		2
2	X－1～3	112.0	77.0	38.0	480	石英安山岩	3		2
3	X－1～3	(117.0	(76.0)	39.0	470	石英安山岩	2		2
4	X－1～3	106.0	76.0	56.0	620	石英安山岩	2	2	6
5	X－1～3	(105.0)	(74.0)	(51.0)	(500)	石英安山岩	2	1	
6	X－1～3	117.0	78.0	44.0	250	石英安山岩	1		2
7	X－1～3	158.0	29.0	97.0	2,300	安　山　岩	1		1
8	6区A－2	(115.0)	77.0	(23.0)	(250)	石英安山岩	1		
9	X－1～3	(108.0)	77.0	29.0	(370)	石英安山岩	7		3
10	X－1～3	96.0	84.0	49.0	430	石英安山岩	2		2
11	X－1～3	107.0	93.0	46.0	550	石英安山岩	4		
12	X－1～3	120.0	60.0	45.0	520	石英安山岩	2		2
13	X－1～3	44.0	57.0	44.0	250	石英安山岩	1		1
14	X－1～3	90.0	77.0	58.0	500	石英安山岩	2		2
15	X－1～3	96.0	84.0	49.0	430	石英安山岩	1		1

図版	地区・層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	凹の数 上面	側面	下面
16	X－1～3	152.0	62.0	44.0	(555)	石英安山岩	1		
17	X－1～3	103.0	(62.0)	62.0	430)	石英安山岩	2		6
18	X－1～3	93.0	86.0	52.0	520)	石英安山岩	1		2
19	X－1～3	91.0	78.0	57.0	480	石英安山岩	1		1
20	X－1～3	71.0	70.0	62.0	425	石英安山岩	1		

磨　石

図版	地区—層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材
21	表　土	(69.0)	(37.4)	(33.3)	(225	石　英　安　山　岩

石　皿

図版	地区—層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	高さ(mm)	重量(g)	石　材
22	表　土	(106.2)	(71.6)	(56.2)	(56.2)	(710)	石英安山岩質砂岩

石　皿

図版	地区—層位	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	高さ(mm)	重量(g)	石　材
23	X－1～3	(110.0)	(204.0)	(75.0)	(76.0)	(2,500)	石英　安山岩
24	X－1～3	(147.0)	(167.0)	(60.5)	(85.5)	(2,400)	石英　安山岩

第2表　石　器　観　察　表

Ⅵ. 考　　察

1 遺構

発見された遺構には遺物包含層と土壙がある。

ａ．遺物包含層

遺物包含層は4層に細分されたが、各堆積層からは縄文時代後期前葉南境式の土器が出土しており、各堆積層はさほど時間的な幅を持たずに堆積したものと考えられる。なお、出土遺物の中には縄文時代中期末葉大木10式土器がわずかであったが出土している。混入の可能性がある。

ｂ．土壙

土壙内の堆積層からは不定形石器2点及び撚糸文(原体不明)及び縄文(ＬＲ・ＲＬ)の施文された胴部破片が各1点ずつ出土しているが、遺構の年代を決定できる資料はなく、年代については不明である。また、遺構の性格についても不明である。

2 遺物

ａ．出土土器に関する問題点

本遺跡から出土した土器は1. 器形、2. 文様表現技法、3. 文様及び文様構成等の違いから第一群土器：縄文時代中期の土器、第二群土器：縄文時代後期の土器、第三群土器：縄文時代晩期の土器に分けられた。第一・三群土器については出土量も少なく、年代については詳述しているので、ここでは除いて考えることにする。

第二群土器は縄文時代後期前葉の南境式に比定されることは前述した通りである。ところで陸前地方の縄文時代後期前葉の型式については伊東信雄(他東：1957)によって南境式として設定されている。その後、後藤勝彦はこの時期の土器を宮戸Ｉｂ式と呼び(後藤：1968)、さらに近年、宮戸Ｉｂ式の細分を示唆している(後藤：1974)。また、それとは別に後期初頭の土器として門前式ならびに袖窪式が設定されている。このように後期前葉の土器群はさらに細分される可能性を含んでいる。本遺跡における第二群土器についても同様な事が窺える。

本遺跡におけるＩＢＩａ類、ＩD1ａロ類、ＩD1ａハ類は門前貝塚出土土器(吉田：1960)に類例が見られ、門前式土器と考えられるものである。

ＩD1ａイ類のように口縁部をめぐる隆起線に刻目ないし刺突が施されている土器は門前貝塚出土土器(吉田：1960)に類似している。また、口縁部に無文帯を有し隆起線がめぐるものは大木10式土器とも類似している。従って、Ｉｂ1ａイ類は、門前式がそれ以前の可能性がある。

ＩＢ2ａロ類は、器面全体に刺突文が施されるものである。このように、器面全体に刺突文を施す技法は大木10式から後期初頭にかけて見られるものである。従って、本資料も同時期と考えられる。

以上述べたように、第二群土器の中には、後期初頭から大木10式にまで遡ぼる可能性のある土器がわずかに含まれているが、それ以外の土器については、その特徴から一群の土器として理解しておきたい。

ところで、このように包括された一群の土器について、器形、文様表現技法、文様及び文様構成等を総含的に検討して見ると大きく次の3つのグループに分かれる。

第1のグループは頸部「く」字状に屈曲し、口縁部外傾もしくは外反する器形を持ち口縁部から頸部にかけては無文帯がめぐっているものである（ＩＡ類）。口縁部に大小の突起を持ち、把手・隆起線または沈線によって突起部と胴部文様を連続している。

第２のグループは、頸部でわずかにくびれるものや口縁部が内傾する器形のものもあるがおおむね単純な深鉢形と見られるものである。口縁部に無文帯がめぐることを特徴とする（ＩＢ1 類、ＩＤＩ類）。口縁部に突起下に施された盲孔や向かい合う小さな弧状の沈線を中心として磨消縄文手法による下垂文様が多い。なお、口縁部無文帯という特徴からはずれるがＩＢ2 ハｉ類とＩＢ2ｃロ類は磨消縄文手法による下垂文様を持つという点で共通している。なお、ＩＢ2ｂハｉｉ類（第 11 図 16）は小形の器形のものであり、視点を違えた類別が必要とするものである。また、このグループの中には体部に地文のみが施されるものもある（ＩＢ1ｂ二類）。

第３のグループは小破片が多く不明確な部分が多い。胴部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形のものが大部分を占め、胴部から頸部にかけて外傾、口縁部内反するものもある。口縁部まで文様が描かれており、口縁部文様と胴部文様が区別されているもの（ＩＢ2イ類、ＩＢ2ｂイ類、ＩＢ2ｂロ類、ＩＢ2ｃイ類、ＩＣ類）が多い。口縁部文様は沈線による「U」字文、楕円文によって構成されるものもあるが、多くは刻目の施された隆起線または沈線のみと言う単純なものが多い。第 11 図 14 の土器については小破片のために類別に際しては、不明な点が多い。

以上、3 つのグループの土器群相互の関係については、その出土状況から見て時期差は認められない。ただし、これらの土器群間に細かな時期差を見い出そうとする見解（後藤：1974）もあるが、本遺跡の場含量的にも少なく、その点については十分な検討を加えることができなかった。

ｂ．その他の遺物

土器以外の遺物には、土製品（耳飾、円板状土製品）、石製品（剥片石器－石鏃・石錐・石匙・不定形石器、石核、磨製石斧、凹石、石皿）などがある。

遺物包含層から出土している土製品・石製品の大部分は縄文時代後期前葉南境式期のもの(一部縄文時代中期末葉大木10式期のものも含まれている可能性がある)である。

土壙内堆積土・表土・出土地点不明の土製品及び石製品については、本遺跡出土土器の大部分が縄文時代後期前葉南境式期のものであることから、同時期のものである可能性が強い。

Ⅶ. ま と め

1. 金取遺跡は大和町の町役場から約 4.5 km西方の地点にあり、吉田川が形成した河岸段丘上に立地している。
2. 出土遺物としては、縄文土器(中期末葉－大木 10 式、後期前葉－南境式、晩期後葉～末葉)や土器以外の土製品(耳飾、円板状土製品)、石製品(剥片石器－石鏃・石錐・石匙・不定形石器、石核、磨製石斧、凹石、磨石、石皿)がある。

   南境式土器は、遺物包含層の主体を占め、器形･文様表現技法･文様及び文様構成等から大きく 3 つのグループに分かれた。要約すると以下のようになる。

   第 1 のグループ－頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部外傾もしくは外反する器形を持ち、口縁部から頸部にかけて無文帯がめぐっているものである。口縁部には大小の突起を持ち、把手・隆起線、または沈線によって突起部と胴部文様を連続している。

   第 2 のグループ－頸部でわずかにくびれるものや、口縁部が内傾するものもあるがおおむね単純な器形で、口縁部に無文帯がめぐっているものである。口縁部に突起を持ち、突起下に施された盲孔や向かいあう弧状の沈線を中心にして、磨消縄文手法による下垂文様が多用される。

   第 3 のグループ－胴部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形のものがほとんどである。口縁部まで文様が描かれており、口縁部文様と胴部文様が区別されているものが多い。

   以上のように大きく 3 つのグループに分かれたが、これらの土器群はその出土状況から見て時期差の認められないものである。
3. 遺構としては遺物包含層や土壙 1 基が発見されている。遺物包含層からは縄文時代中期末葉～後期初頭のものも出土しているが、出土遺物の大部分を占める縄文時代後期前葉南境式期のものである。土壙は時期や性格が不明である。
4. 今回の調査範囲内では、縄文時代後期前葉南境式期の遺物包含層しか検出されなかったが段丘平坦面には、同時期の住居跡群の存在が予想される。

引用・参考文献　（アイウエオ順）

一迫町教育委員会(1977)『巻堀遺跡』

伊藤信雄(1957)「古代史」『宮城県史』第1巻

及川・小野寺他(1972)『堂の前貝塚』

及川・遠藤他(1974)『門前貝塚』

角田市教育委員会(1976)『梁瀬浦遺跡』

北上市教育委員会(1969)『北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査報告』

北上市教育委員会(1978)『八天遺跡(図版編)』

北上市教育委員会(1979)『八天遺跡(本文編)』

草間・金子(1971)『貝鳥貝塚』

後藤勝彦(1957)「陸前宮戸島里浜貝塚出土の土器編年について」『塩釜市教育委員会教育論文』第2集

後藤勝彦(1962)「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」『考古学雑誌』第48巻第1号

後藤勝彦(1974)縄文後期宮戸Ｉｂ式周辺の吟味『東北の考古・歴史論集』平重道先生還歴記念会編

後藤勝彦他(1968)「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」『宮城県文化財調査報告書』第15集

後藤勝彦他(1972)「宮城県柴田郡川崎町中沢遺跡発見の竪穴住居と複式炉について」『仙台湾』第2号

後藤勝彦他(1975)『宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告』

小山・竹原(1967)『新版標準土色帖』

大和町教育委員会(1966)「宮城県黒川郡大和町鳥屋八幡古墳発掘調査報告」

大和町教育委員会(1967)「鳥屋八幡二号墳－宮城県黒川郡大和町鳥屋遺跡調査報告」

大和町教育委員会(1975)「大和町史」上巻

東北学院大学考古学研究部(1975)「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告」　温故第9号

西村・玉口他(1957)「堀之内貝塚り、ハ、エ地点発掘報告」

芳賀良光(1968)「宮城県宮戸島貝塚梨木囲遺跡の研究」

藤沼邦彦(1975)「宮城県の経塚について」『東北歴史資料館研究紀要』　第1巻

宮城県教委(1973)「東北自動車関係遺跡発掘調査略報－勝負沢遺跡・八谷館跡」
『宮城県文化財調査報告書』　第31集

宮城県教委(1973)「菅生田遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』　第29集

宮城県教委(1975)「東北白鳥車道・一般関係遺跡発掘調査略報－御所館跡」『宮城県文化財調査報告書』

宮城県教委(1976)「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』　第46集

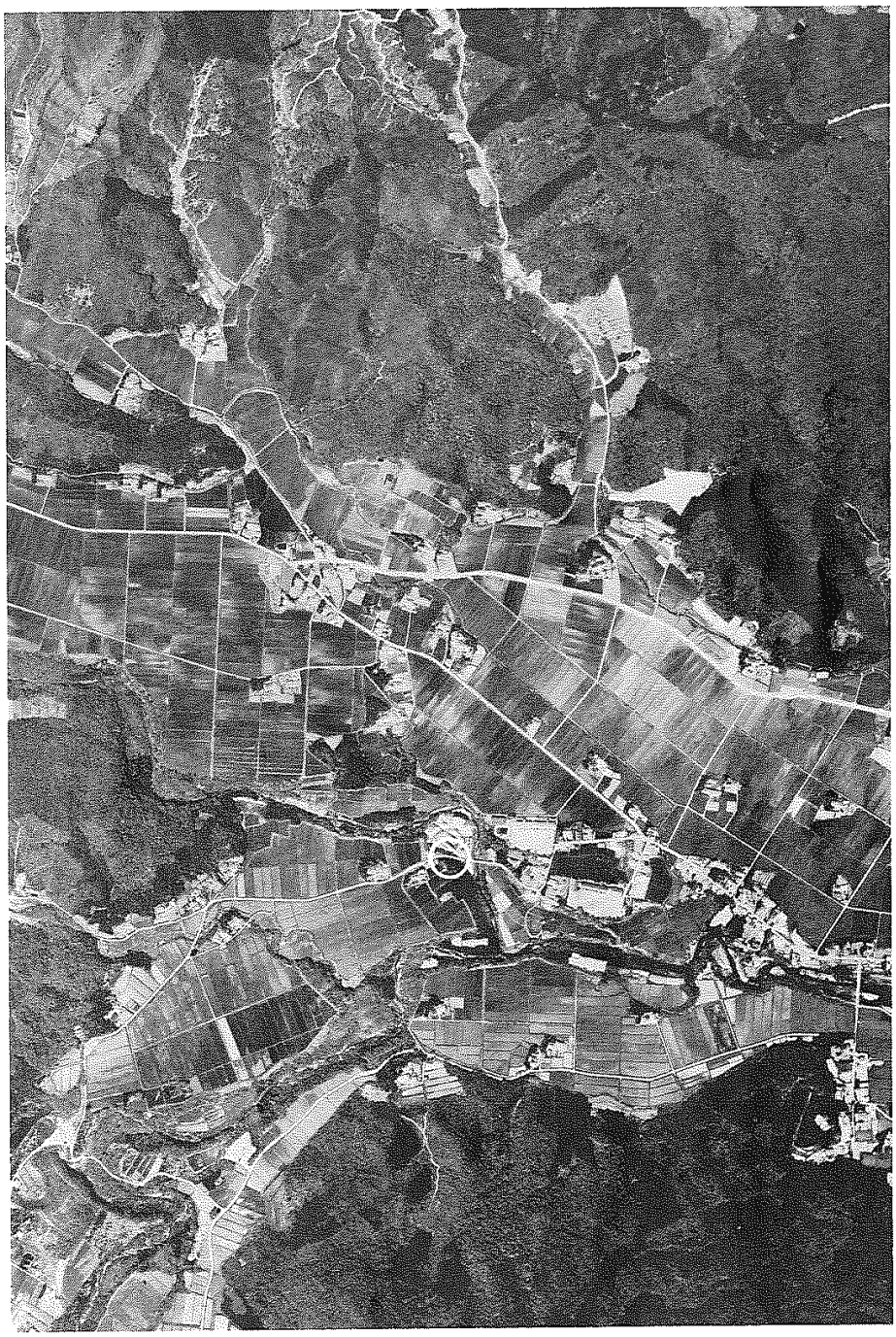
宮城県教委(1978)「湯坪遺跡発掘調査概報」

山内清男(1930)「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」　考古学　第1巻第3号

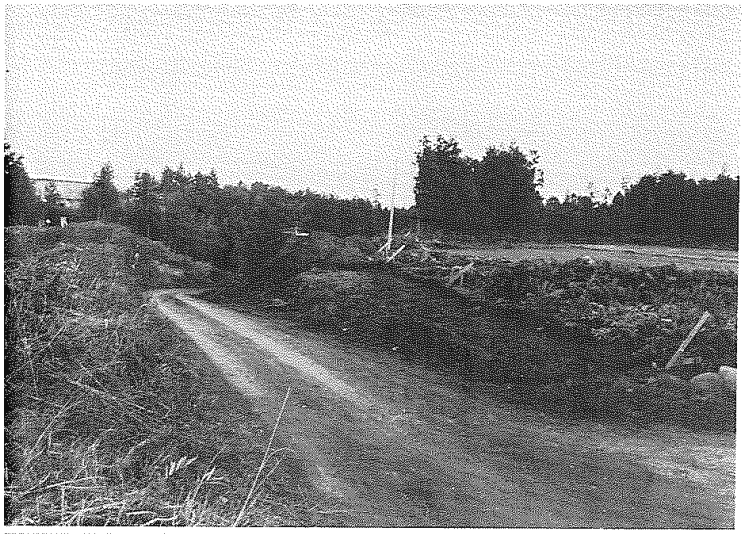
吉田義昭(1960)「門前貝塚」

渡辺・馬目(1968)「小名浜」

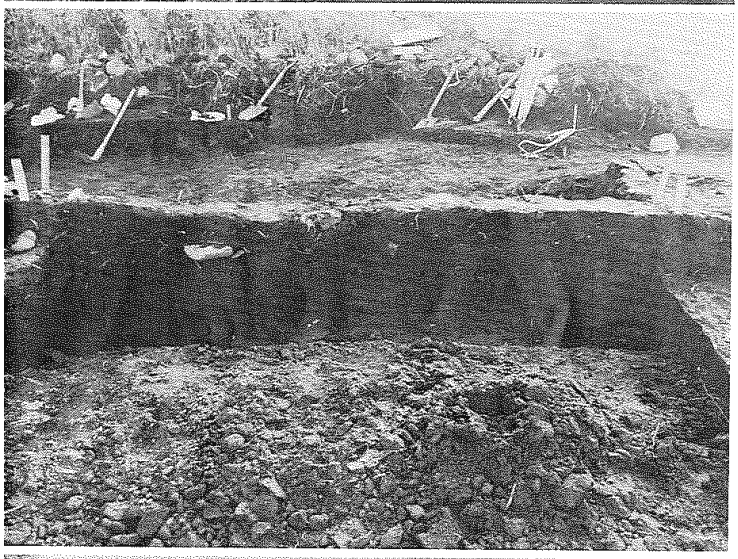
写 真 図 版



図版Ⅰ　遺跡遠景　○印：金取遺跡



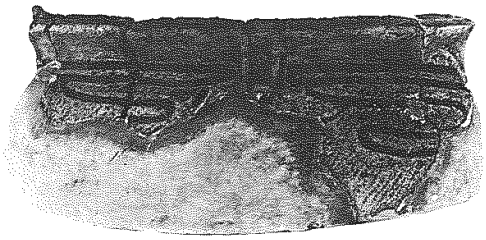
遺跡近景



遺物包含層
断面図

土　　壙

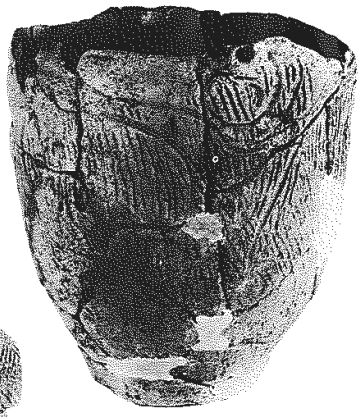
図版 2



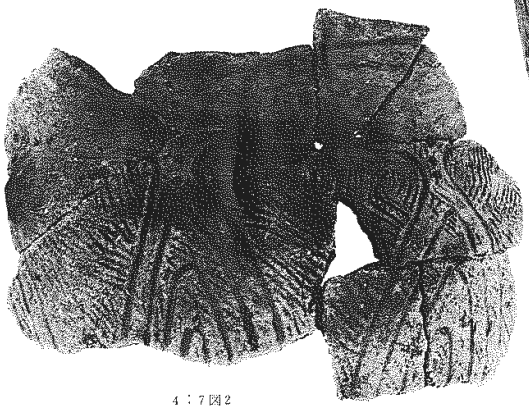
1：6図16

2：7図1

3：10図



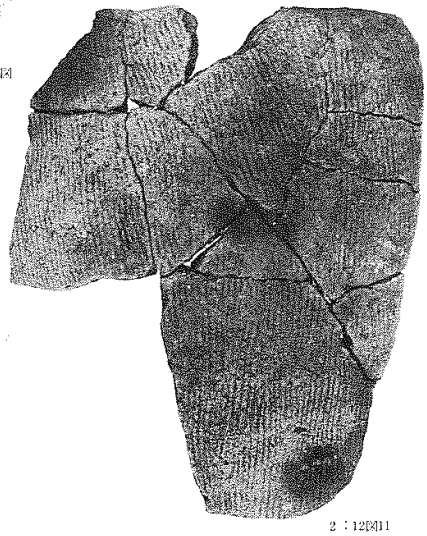
5：9図1



4：7図2

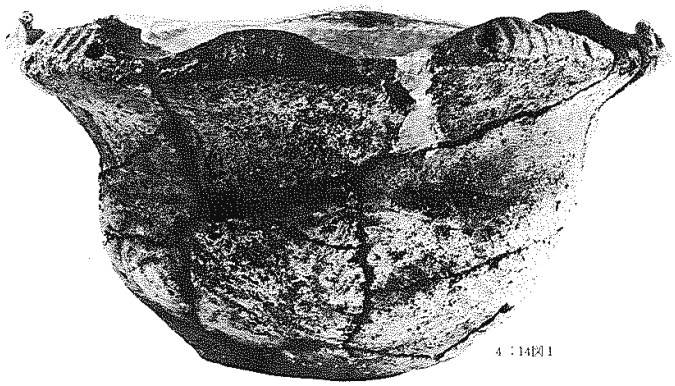
図版3　土　　器（Ⅰ）

1：13図



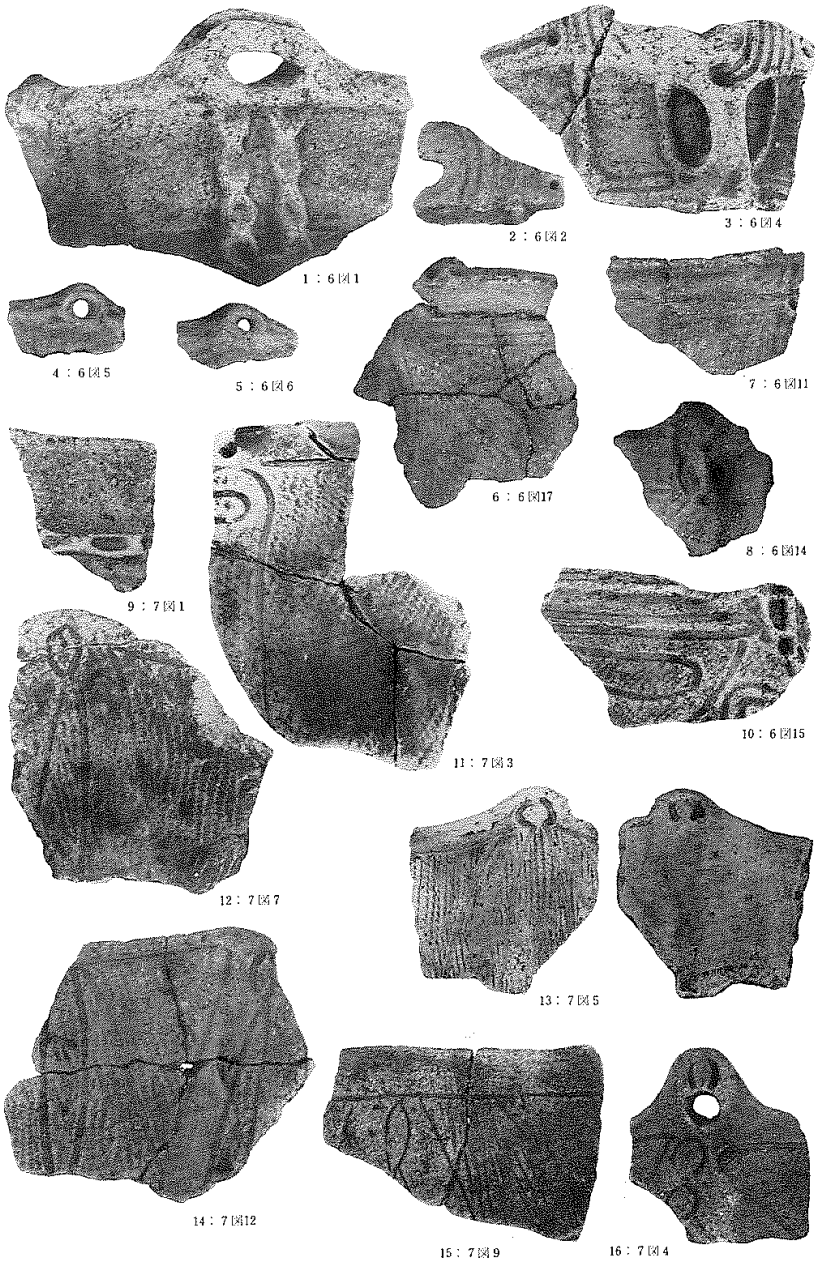
2：12図11

3：14図2

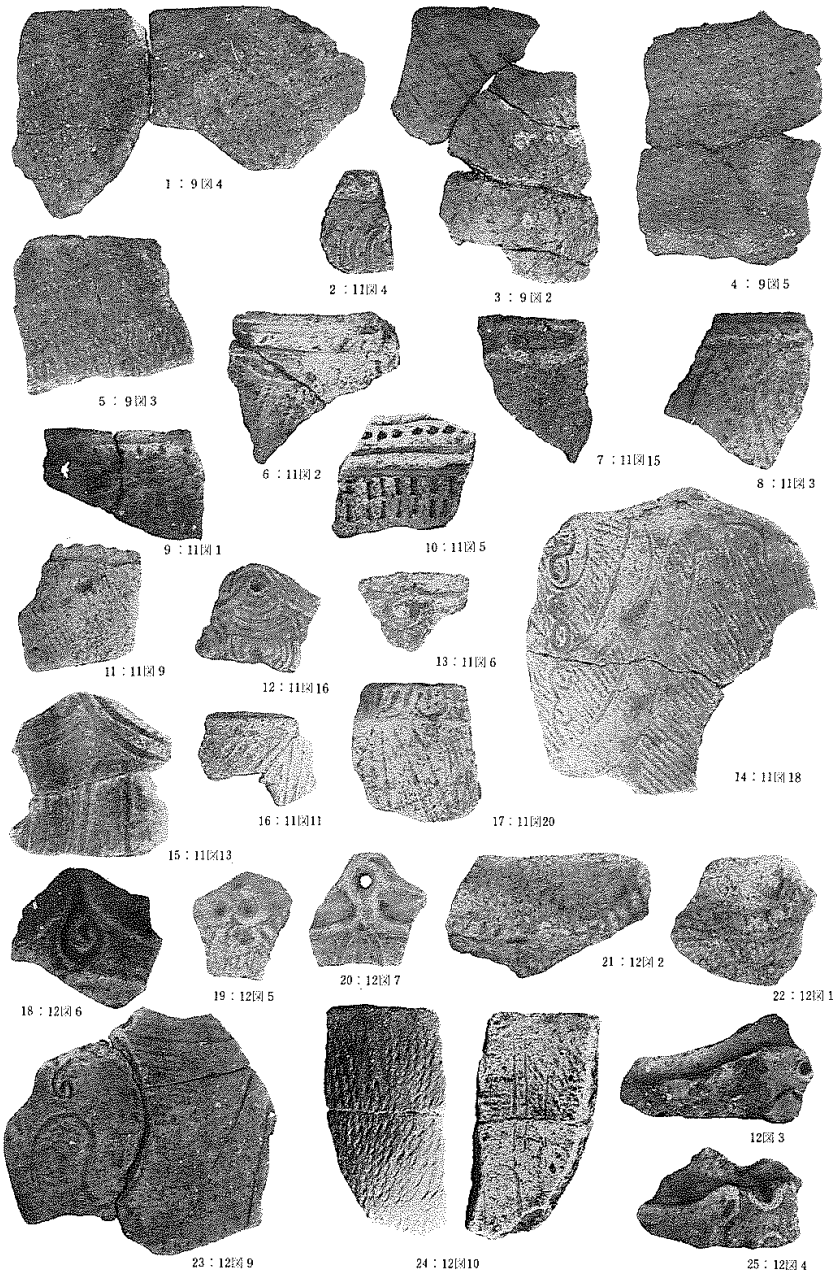


4：14図1

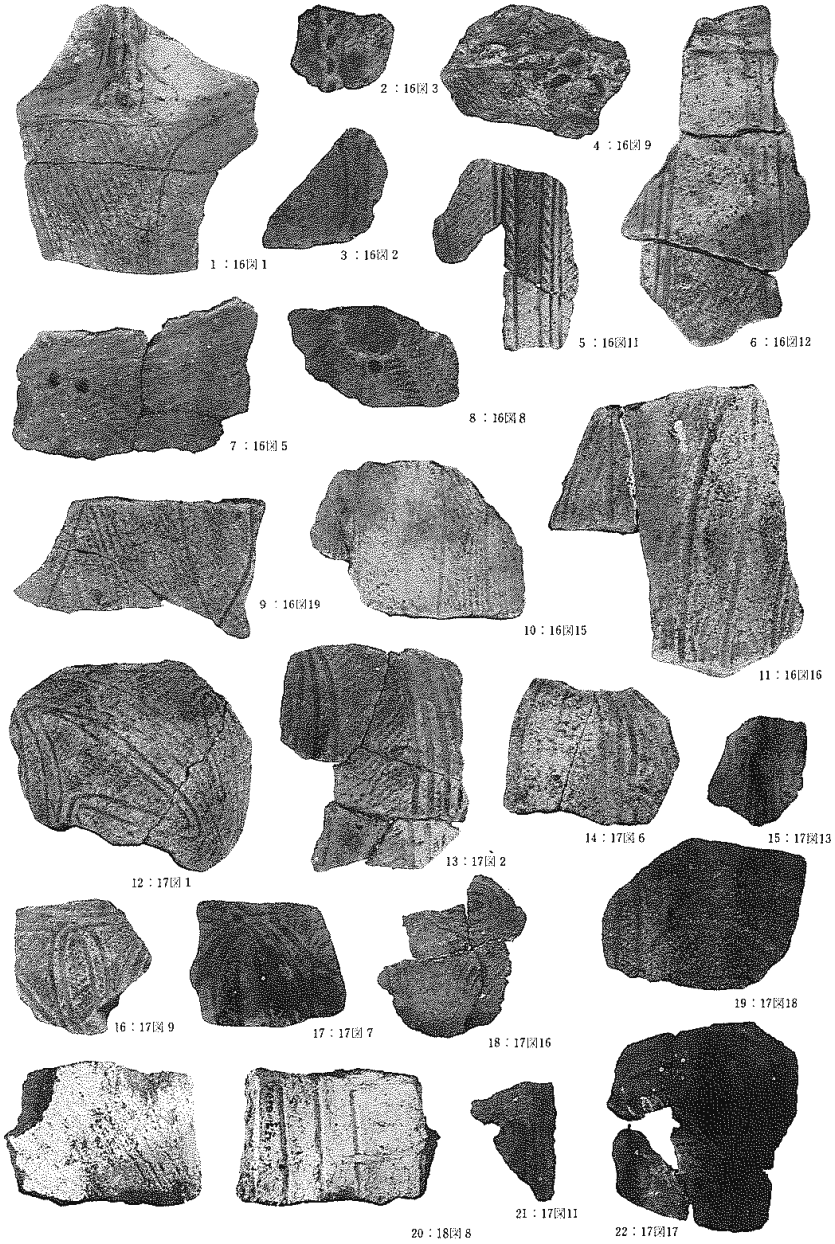
図版4　土　　器（2）


1：6図1
2：6図2
3：6図4
4：6図5
5：6図6
6：6図17
7：6図11
8：6図14
9：7図1
10：6図15
11：7図3
12：7図7
13：7図5
14：7図12
15：7図9
16：7図4

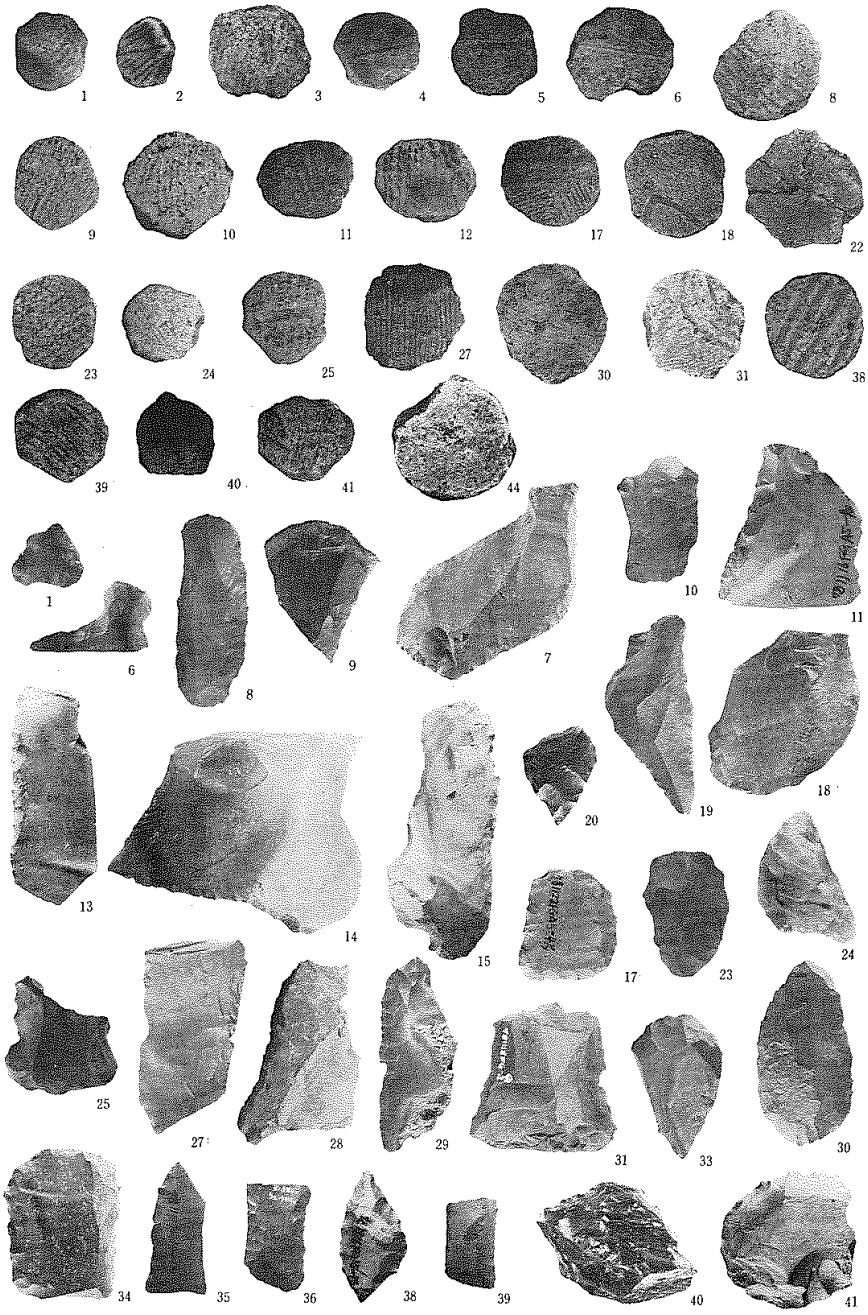
図版5　土　　器（3）


1：9図4
2：11図4
3：9図2
4：9図5
5：9図3
6：11図2
7：11図15
8：11図3
9：11図1
10：11図5
11：11図9
12：11図16
13：11図6
14：11図18
15：11図13
16：11図11
17：11図20
18：12図6
19：12図5
20：12図7
21：12図2
22：12図1
12図3
23：12図9
24：12図10
25：12図4

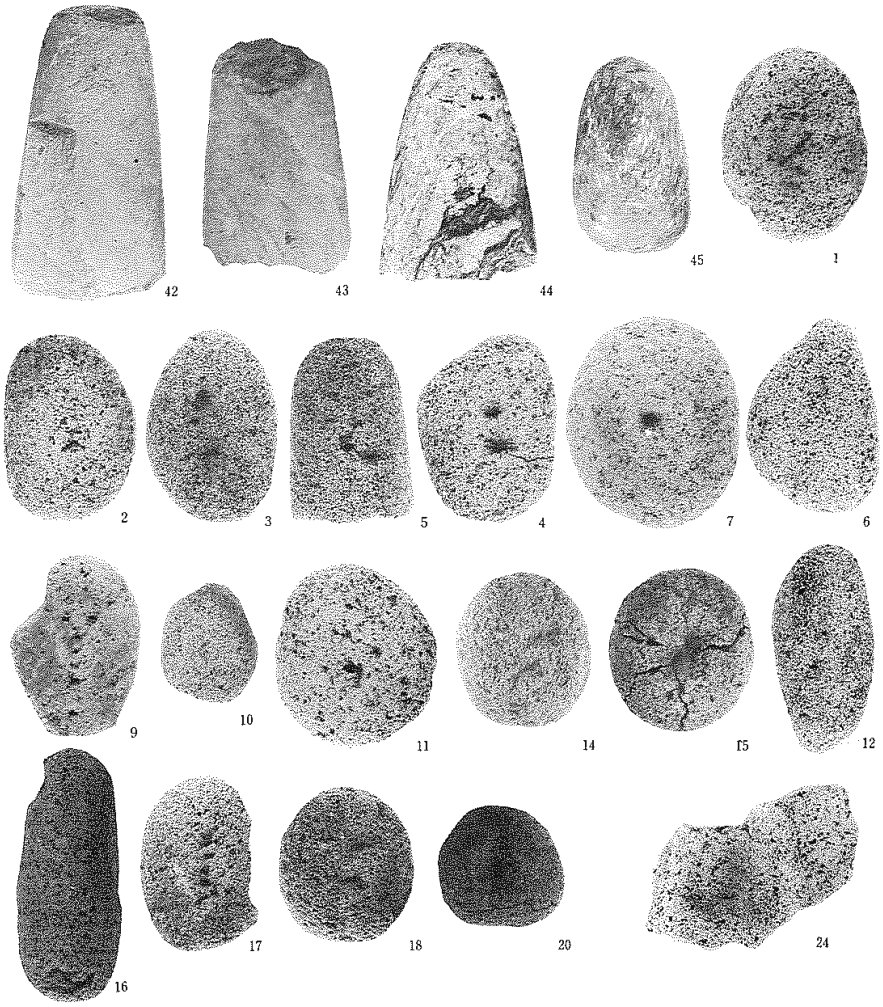
図版6　土　　器（4）


1：16図1
2：16図3
3：16図2
4：16図9
5：16図11
6：16図12
7：16図5
8：16図8
9：16図19
10：16図15
11：16図16
12：17図1
13：17図2
14：17図6
15：17図13
16：17図9
17：17図7
18：17図16
19：17図18
20：18図8
21：17図11
22：17図17

図版7　土　　器（5）



図版 8　円板状土製品、剝片石器、石核



図版 9　磨製石斧、凹石、石皿